
カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダム S E E D で暴れるよ～！

メア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

【Zコード】

Z3078Z

【作者名】

メア

【あらすじ】

アンラ・マンコの暇潰しの為に殺された人々の意識が集合体となつてガンダムSEEDの世界にチート貰つて転生させられた。

転生させられた先は、ユージン・ヒビキが生き残つたところ。
つまり、キラとカガリの妹なんだ。

そして、ルナティックコーディネイターに改造されたので、世界を

滅ぼしたら、リゴールへりこました。

ヒロインはステラ、ルリ

世界の破壊

何処にあるのかも分からない空間に一人の声がする。

「こゝはどこ、ぼくはだれ？」

「こゝは死後の世界、お前は死者達の集合体」

死後の世界？ 学校がいいな？ 集合体って事は寄せ集めか～だから記憶がないのか。

「あれは幻想。そしてなぜに疑問形？」

なんとなく～？ それで、天国？ 地獄？ なんで死んだの？

「支離滅裂だな。まあ、我の暇潰しの為だけに殺したのだし、天国でも地獄でもないな」

そつか～～ならいいや～～

「あつせりしているな」

「スロリ幼女に殺されるならほんまうだから？」

「ヒテオの変わりの暇潰し要員には良さそうだ」

褒められた！ やつたね？

「しかし、いい加減本題に入るが、貴方達には転生してもいつのチートももらえるならいいよ？」

「くれでやるチートは五つだ。何がいい？」

「何でもいいの～～？」

「うむ。このアンラ・マンゴに不可能は無い」

「なら、努力すれば何でもできる才能上限無しと知つていれば何でも召喚できる召喚魔法、召喚した対象を服従させられる能力～～？あつ、もひるん全て説明書つきでね。

「どれもアホな力じやな。他の一つばかりあるべく後はいらぬや～～

「なり、じつちで適当に改造しておけ。精々我を楽しませろ」

アイアイサー！

新たな生命が産声を上げた。

「あなた、可愛らしい女の子よ」

「「ひむ、」この子はこうい子に育つだろ？」

幸せな家庭だね！」

でも、実際は…………」ひむ。

「あなた、何をするの！？」

「ふははは、私は実験に成功しスーパー「コーディネイター」を作り上げた！ 故に、私はスーパーを超えるウルトラ……………いな！ ウルトラを超えるルナティックコード「コーディネイター」を作りあげる！」

わあ～マジドさんだ～～！

「やめてえっ！」

「うるさい、邪魔だ！」

銃声が聞こえて、母親らしき物が出来上がった。

「もはやブルーコスマスにも邪魔させぬ！ ふははははははははははは！」

それから、培養槽に入れられて身体中をいじくられました。身体の中はぐちゃぐちゃ、脳は量子コンピュータが取り付けられたり、苦痛やなんやらで精神が壊れかけた。

一年が立つて、動けるよくなつたので、血文字で召喚陣を書いて召喚を行つた。

「来たれ」アンラ・マンゴー

世界に穴が開き、中から闇そのものがはいで出て來た。

「向よ、こきなり呼んで……」

「世界を滅ぼして」

「ふやけ…………あれ？」

アンラは命令に従い、世界は闇に飲まれ無に帰した。

終わり。

「ひつ、終わらないうわよー。」

あはははー。

「で、なんでこんなことしたのよ？」

「あんな世界壊れていいよー」というか、女の子だつたし！

「まあ、ランダムとはいえ、あの狂氣科学者凄いわね。実際、ウルトラなら成功してたかも」

で、どうすんの？

「私は結構満足したけど、暇潰しにはなってないのよね。リコールよ。能力に神の召喚、従わせるのは禁止して、弱体化の変わりになんか付けとくわね」

了解、行つてきます～～！

新たに目覚め？（前書き）

なぜか投稿できていなかったので再投稿

新たな目覚め？

目覚めたら、知らない天井が眼に入ったよ。

「気が付いたか」

「おじさんだれ？」

「ウズミ・ナラ・アスハだ。そして、こっちが姉のカガリ・ユラ・アスハだ」

「…………（こぐく）」

アスハ家とはまた色々とまずいね。いや、好き勝手にできるからいいかな？

「お父様、もういいか？」

「そうだな、後は任せる」

お父様が去つていった。残つたのはカガリ。

「いいが、お前はカナデ・ユラ・アスハだ。そして、私の二歳年下だから、私が姉だ！」

名前がカナデか。カガリを見るに、カガリは六歳くらいだから、私

は四歳かな。

「おこ、聴いてこむのかつー!?.」

聴いてません。

「おねえさまあ、カナガテはねむいのとつみんます」

「おこひ、待てつー!?.」

「ニニニニニニ」

「もひ、寝てゐ…………」

「カガリ様、ビリですかつー!?.」

「へつ、もひ来たか…………」
「は逃げるしかない!..」

カガリは何処か行つた。これでよしつと。

「とつあえず、鏡さん鏡さんビリですか~」

部屋は何て言づかファンシーで、ぬいぐるみがじつぱーある。それ
も、4LDKが出来そくなぐらーこの部屋をまるまるつめつくすよう
な数だ。その中で鏡を探すために適当に頭に受かんだフレーズを口
ずさんだ。

「リリですよ~」

「反応が返つてきたー!?.」

天幕付きのベットの後ろから声が聞こえて来たので、そつちをみると姿見の大きな鏡があつた。

「ちやお」

「ちやお」

鏡の中には、金色の蒼瞳で蒼銀色の長い髪の毛をした天使のような美少女と同じく全身真っ黒なゴスロリ少女がいた。

「さて、なぜなにマンゴが始まるよ~」

ドンドンパフパフなどの効果音が聴こえた。

「アシスタントは、私アンリと私アンリでお送りいたしま~す~」

「同じ人物じゃない」

鏡の中で分裂した「スロリ。

「まあまあ、気になる質問を答えるよ、貴方がAngel Beats!の世界に行きたかったみたいだから、私が貴方の容姿をAngel Beats!の天使ちゃんにしてあげました~」

「わ~~いらない事しやがつて~~」

「.....」

「貴方は右脳と左脳にエブレインといつ超高性能量子コンピュータ

が取り付けられているわ

流したな。

「そこにAngelP1ayerも入ってるし、貴方はマシンチャイルド、ニコータイプ、イノベイターもあるから気をつけてね。原作は10年後だから、後は好きにしなさい。ステータスも開けるし便利なものもついてるしね。後、何人かサポート要員召喚したいから、頑張ってね」

「結局、チートは何だったんだ?」

ブレインで調べてみると、鍊金術が出来る事が判明した。後、身体が賢者の石だから質量無視で鍊成できるよ。

「まあ、ステータスを開くこつかな

ステータス
技術レベル1
開発レベル1
操縦レベル1
戦闘レベル1
経営レベル1
肉体レベル2
召喚レベル1

どうやら、強いのを召喚出来ないみたい。最初だけコストとか完全無視で良いみたいだけどね。戦艦と機動兵器、パイロットならなんでもよしか。まあ、最初は放置だけど。明日から頑張りつ。

次の日、身体は動くのでサボリにやつて来たカガリを捕まえて家庭教師の勉強を一緒に受けた。

その後、グロッキーになつているカガリを放置して、図書館で読書しながら、エブレインを使ってモルゲンレー・テ社とプラントにハッキングをかけて技術を吸収した。それからは、エブレイン二つとマシンチャイルド、ルナティックコード・ディネイターの力をフル活用して開発と技術力の向上を行い続けた。

行動開始してから三年間がたつた。

やつたことは相変わらずの技術力と開発力を鍛えながら、戦闘技術を練習した。ガードスキルを天使ちゃんに操れるようになつた。鍊金術は金やダイヤモンドを鍊成して売り払いまくつて、オープに近い無人島を買い取つて、地下に秘密基地チヨーリップ・クリスタルを鍊成した。後は、ボソンジャンプなどの訓練をやり続けたらCC無しで問題無く転移できるようになつた。

「さて、いい加減戦力を召喚しよう。召喚するのはこの世界では異質な存在…………我が喚び声に答えよー」

秘密基地の奥深くで召喚された機体とパイロット。

機体名：モルドレッド

形式番号 RZA-6DG

分類 ナイトオブランズ専用KMF

製造 ブリタニア

生産形態 ナイトオブシックス専用機

全高 4.71m

全備重量 10.23t

推進機関 ランドスピナー

フロートシステム

武装 シュタルクハドロン（4連ハドロン砲）

小型ミサイル

特殊装備 ブレイズルミナス

乗員人数 1人

搭乗者 アーニャ

モルドレッドは、アーニャ（ナイトオブシックス）専用KMF。凄まじい砲撃性能と防御力を誇る重量級KMF。その火力とパワーによる強襲戦闘を得意としている。基本カラーは赤紫。

主武装は両肩にある一対の装甲を連結させることで構成される4連ハドロン砲・シュタルクハドロンであり、浮遊航空艦でさえも一撃で破壊してしまうほどの威力を誇る。また全身に小型ミサイルが内蔵されており、総合的な火力はケタ違いとなっている。超重装甲と機体全周をカバーするブレイズルミナスを併せ持ち、防御力も最高峰のレベルである。

機体の出力も極めて高く、KMFの頭部を片手だけで粉碎するパワーと、重量級ながらグロースターにも匹敵するほどの機動力を併せ持つ。

「……は……？」

彼女はアーニャ・アールストライム

「ナイトオブシックス」の地位に就いている少女でマントの色はピ

ンク。ピンク色の髪を頭の後ろでまとめている。幼いながらも最少でラウンズとなつた手腕。

「ここは私の秘密基地」

「貴女が私のマスター？」

「そう。私が貴女のマスター。後、記憶は戻つてゐる？」

「…………戻つてゐ…………」

記憶が戻つた事に泣いて喜ん出入るアーニャを抱きしめて、しばりく宥めていた。

「私はマスターに従う」

「ありがとう。なら、先ずはモルドレッドを改造しよう。アーニャは適当に基地内を見学してて」

「わかった」

アーニャが去つた後、モルドレッドをハンガーにセットして、機体を弄る。今ままじや、ガンダムとの大きさが四倍も違つ。

「まず、動力炉を相転移エンジンに変えて、ディストーションフィールドとディストーションブースト、装甲にPS^{フライズシフト}装甲を追加、さらにブースターとGキャンセラー、腕は紅蓮参式の奴でいいや

モルドレッドの大きさも大きくなつて15Mくらになつた。当然、ミサイルの発射数を増やした。

「さて、これから楽しくなりますね」

モルドレッドの改造が終わり、次の目的を狙うことを開始した。

アーニャたんの魔改造

Side アーニャ

私が召喚された時は、ブリタニア皇帝ルルーシュ君との最終決戦で、オレンジの人々に殺されそうになつた時、ここに連れて来られた。

「うん……記憶、戻つてる……嬉しい……」

あの人気が私の身体を好き勝手に使つてたんだ。それは許せないけど、それより皆が気になる。

「…………でも…………今の私は…………マスターに従うだけ…………」

記憶の御礼もあるから、今は私の全力でマスターをサポートする。

「…………それにしても、面白い…………」

地下はデータセンターなど施設、地上は、ブリタニアの富殿のような施設と遙か太古に滅んだ恐竜が沢山いる。

「…………記録…………」

「グルルルウ！」

記録を録りながら歩いていると、大きな口を開けながら迫つて来る

ティラノザウルスに携帯を向けて「写真撮った。

「って、何してるの！」

「がふつ！？」

私の目の前で大きく口を開けて、私を食べようとしていたティラノザウルスの頭にマスターのキックが入り、ティラノザウルスは吹き飛んで行きました。

「…………何って…………記録…………？」

「…………もういい…………地上には勝手に出ないでね。猶大がわりにホムンクルス放つてるから」

「…………わかった…………」

「凄く残念…………無念。

「そんなんに残念がらなくても…………まあ、時間が空いたら一緒に散歩しようか」

「うん」

「なら、いい。

「さて、アーニャ、次は君の番だから行こう！」

「？」

分からないので小首を傾げてみたけど、連れて行かれた。

連れて行かれた場所は研究室。

「そこに裸になつて寝て。検診とか色々するから」

「分かつた」

言われた通り裸になつてベットに寝た。

「つ

注射を打たれて、点滴を入れられた。

「それじゃ、お休み…………」

私は意識がだんだんと無くなつて来た。

次に目覚めた時、私は培養槽の中にいた。

「…………ん

「起きた？ 気分はどう？」

「頭が痛い」

脳裏に色々と分からぬ言葉が浮かんで来る。

「アーニャには、エブレインとマシンチャイルド + エブレインにゼロシステムを組み込んでおいたよ」

「？」

「エブレインはこの脳裏にあるパソコン？
ゼロシステムとかマシンチャイルドって何？」

「マシンチャイルドはIFSとの親和性を高めた存在だよ。IFSは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした代物だよ。IFSは体内にナノマシンを注入し、補助脳を形成しこれによってイメージを機体へ伝える。このナノマシン注入には不快感を伴い、またナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によつては幻覚（幻聴）を伴うこともあるらしいけど、そつちは改良しておいた。脳にあるエブレイン…………生体コンピュータがアーニャのイメージ通りに身体や機体を動かしてくれるよ」

「なるほど…………ゼロシステムはまた別？」

「ゼロシステム（Z·E·R·O·SysteM）、正式名称「Zonining and Emotional Range Omni-tted System」（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結果を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝

利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構だよ。

これは、コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによつて得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状レーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミーマーカーのみで戦闘行為を行う。

まあ、本来機体につけるものをエブレインに投入したんだ。だから、機体を自分の肉体に置き換えたり、その逆もできる。簡単に言うとIFS、エブレイン、ゼロシステムの組み合わせで、ほぼノータイムで自身のやりたいように機体を動かして、未来予測で確実な殲滅を可能とする

「一騎当千？」

「多分」

「問題は、ゼロシステムに踊らせられない事、最優先はアーニャの生存でいいからね」

「了解」

「あつ、写真とかエブレインで撮れる?」

「もちろん撮れるよ

「嬉しい…………」

早速、写真などの記録をエブレインに移した。

それから、鈍った身体のリハビリを行つた。その次に、格納庫に行き、大きくなつた私の愛機モルドレッドを見た。

「胴部にグラビティーブラスト発射装置、ハドロン砲はくつつけ無くとも威力は出るし、拡散タイプの追加と威力の増強、遠隔操作装置などに加え、腰にビームライフルも取り付けといったから、シユミレーターで訓練しておいてね」

「分かった。マスターはどうする？」

「私はホムンクルスの実験だよ！ 人が欲しいからね」

「頑張つて」

「アーニヤもね！」

去つて行つたマスターを見送り、私はシユミレーターに入った。

「ゼロシステム、IFS起動…………//シジョン開始…………」

それから、5時間ほど訓練して、ようやく扱えるよつになつた。ボソンジャンプはまだ怖いけど、そのうち克服する。

アーニヤちゃん可愛いよ。あの無表情がいいね。

「さすが最年少でラウンズに入っただけはあるね。もう、モルドレッドを扱い出してる」

こっちの作業も出来たし、ホムンクルス…………自動人形でも動かせるかな。

「うん、問題無し」

とりあえず、100体ほど作って生産プランの作成と施設の維持をやらせ。まあ、練成した方が早いけど面倒だしね。

「電話だよ、電話だよ」

「ありがとハロ」

自動人形の統括システムとして、サイコハロを作ったから問題ない。

「もしもしそう」

『力ナデ、部屋にいないうだが…………もつすぐ時間だぞ。何処

にいるのだ?』

しまつた、今日は社交界だつた。

「お父様、カナーテは知り合いを連れて行くので少し遅れます」

『知り合いだと?』

『はい。私の護衛をして頂く契約をしました』

『勝手な事をするなど言いたいが、お前はカガリと違つて聰い子だから責任を持つなら好きにして構わん』

『ありがとうございますお父様……』

『つむ、出来る限り早くこい』

『はい』

ふう…………ハーモニクスを置いて置くんだったね。

『アーニャ、帰るから一緒に行こう。』

『分かった』

アーニャを呼んでから、研究室でハーモニクスを起動させ分身を作れる。

『「ジャンケンポン、アイゴーテシヨー』』

「勝つた！」

全員がゼロを使ってジャンケンを行い、勝者が基地に残るんだ。

「オリジナルが負けた…………」

「「「それじゃ、カガリの相手よろしく」「」「」「

「ふんだ………アーニャヒイチャイチャするもん」

五歳の時からハーモニクスを使い、研究や開発などを同時進行で行っている。そのため、負けた奴が大変な目に会う。社交界とか面倒なんだよね。

アーニャの手を握つて基地から屋敷の近くにボソンジャンプして、部屋に戻つた。

「アーニャ、ちょっと待つてて」

「うん」

急いでメイドが来る前にドレスに着替える。アーニャはベットに腰掛け足をぶらぶらさせているけど、アーニャの格好自体はラウンズの儀礼服だからパーティーに出ても問題無い。

「お嬢様っ！」

「あつ、もう着替えてますよつー！」

「私達の仕事を取らないでくださいー！」

だって、着せ替え人形みたいで嫌だからね。

「その方は？」

「この子はアーニャといって、私の護衛及び話し相手です」

「…………よめじぐく」

「分かりました」

多分、話し相手の方を信じたんだね。身長差はあるけど、アーニャの方がお姉ちゃんに見える。

「うわらじびうござ」

私はアーニャの手を握り、魔窟へと赴いた。

パーティー会場は厳重な警備体制が引かれていた。

「今日は厳重なんですね」

「はい、今日は財閥の方々がいらっしゃいますし、お嬢様の誕生日ですから」

「確かに今日でしたね」

「マスター、おめでとう」

「ありがとうございます」「アーニャ。今日で八歳になりました」

そん事を話してると、大きな扉のところに着いたら、大きな声と同時に扉が開いていました。

「カナデ・コラ・アスハ様、御入場っ！」

中に入ると、私と後ろに控えているアーニャに注目が集まり、逃げるよつにお父様のところへ行きました。

しばらく揉撋などの鬱陶しい事をこなしていた。

「ねえ、アーニャ。どうせられるなら、ソキウスのデータや戦艦が欲しいよね

「ソキウスは分からぬけど、戦艦は欲しいね」

まあ、ボソンジャンプで転送出来るんだけどね。

「何言つてんだカナデ？」

「お姉様、御機嫌うるわしうござります」

「お前、おひょくつ…………お父様が呼んでたぞ」

「私は手をあげようとした瞬間に発せられたアーニャの殺気に飲まれたね。

「ありがとうございますお姉様。アーニャ、行きましょう」

「イエス、ユアハイネス」

さて、お姉様を放置してお父様の所に来たんですが……
……非情に帰りたいです。

「来たかカナデ。こちらにいらっしゃるのはアズラエル財閥の方だ」

「初めまして、美しいお嬢さん。私はムルタ・アズラエルといいます。以後、御見知り起きを……」

「なんでブルーコスモスの人がここにいるんですか、殺していいですか？」

「ちょっと、AngelPlayer起動させますね。

「…………カナデ・ユラ・アスハと申します。アズラエル様」

「はい。そちらのお方は？」

「私の護衛をお願いした愛人…………」ほん、友人です」

「…………」

「冗談ですよ？（多分）」

白い皿で見られちゃいました。

「まあ、いい。アズラエル氏はお前を婚約者にしたいそーだ」

「あははは…………お父様、冗談が美味しいですね」

「本氣だ」

「そうです。私は貴女が欲しいー」

「何を馬鹿な事を…………ブルー・スモス盟主である貴女が「一テイネイターの私をですか？」

バット Honduras 丸見えじゃ無いですか、この口コロコロンー。

「何故それを…………」

「もう、決まつた事だ」

さて、どうする?

マルタを殺してアズラエルの材料を得る?

鍊金術で事足りるし必要無い。なら、利用して捨てるか。サハク姉妹も気になるけど…………後回しでいいかな。

「分かりました。ただし、ある程度自由にさせていただきますよ」

「ええ、勿論。これでオープと我が財団の繁栄は約束されました。
これからよろしくお願ひします」

「…………よろしくお願ひいたします」

アズラエルは私を人質とストレス解消、駒にしたいんでしょうが、私の思い通りに踊つて貰いましょう。

「狐と狸の化かし合い？」

狐は九尾でしょうけどね。

あれから少しして、アズラエルの家に連れていかれました。
そして、すぐに襲われそうになつたので逃げて自分に似せた自動人
形と入れ代わつた。

「私の人形、凄い事されてるね」

「始末する？」

「始末するべき」

犯されている自動人形を見ながら、多数のハーモニクスと会議する。

「女として許せない…………」

「男の私達は平氣だけど？」

「むしろしたい」

「…………」「…………」

私達の意識の元は、男6女3その他1だから、ハーモニクスの状態
になるといろいろ凄い事になる。

性格には男の4はオタクだしね。

「今殺せば、歴史が変わるから駄目」

「そうだけど見てられない」

それかも話し合いは平行線を辿った。どうせ意識も無い自動人形と
いう意見があるからね。

「なら、私達は勝手にする」

「そう、分かった」

「じゃあ…………バトルロワイヤル…………勝者に全意識が集積す
る事。勝負はSEEED終了まででいい？」

「……異議なし」

いつの間にか、オリジナルを無視して決まった。

「これは…………手段を選べない」

「召喚や鍊金術は使用回数制限は一人三回まで、令呪は奪取可能と
します」

令呪は召喚した対象に出る。気付かなかつたけど、アーニャのは背
中にあつた。

「アーニャは私が持つてくよ?」

「　「　「うん」」

「後、世界崩壊級などは無し、秘密基地は完全中立で開始は一週間後……」

細かいルールが決まり、ハーモニクス達は出て行った。
これって、最強の敵は自分？

あれ？ しかもアズラエル押し付けられてないかな？
やられた。

アズラエル家の一室。

「アズラエル様…………」の一人、完全に反応無くなりましたぜ？」

床には私とアーニャの人形が倒れている。今までの反応だって面白半分でハーモニクス達がやつてただけだし。

「ちつ、化け物の癖して以外に壊れるのが早かつたな

「コーディネイターなんてこんなもんでしょう」

「なら、第八研究所に送つておけ。エクステンデットのサンプルになるだろ？…………五体満足で殺さないようだけ注意しておけ」

「了解」

これは都合がいいね。戦力入手のチャンスだよ。

三日後、私達の人形が輸送されるのをアーニャと共に、上空からモルドレッドで追っている。

「田標、以前こちらに気付いていない」

私の後ろからアーニャの声が聴こえる。これは、私がアーニャの膝の上に座っているから。

狭いコクピット内じや仕方ないし、モルドレッドは意識だけでも操縦出来るから問題は無い。

「暇だから、盗聴でもしてみる?」

「うん」

アーニャが素早くコンソールを操り、人形から音声を拾つて来る。

『おい、積み荷のお嬢様はどうだ?』

『相変わらず壊れたままだ』

『そうちか、俺も後で楽しませもらひつか。しかし、いいよな〜』

『何がだ?』

無事に盗聴できたみたい。

「面白一?」

「まだ、分からない」

アーニャの質問に答えつつ、盗聴された音に耳を傾ける。

『アンタって、今期から配属だろ?』

『ああ』

『研究員はモルモットの連中を好きに出来るんだろ?』

『確かにそうだな』

モルモットか…………やっぱり地球連合腐つてる。

「マスター」

見捨ててる時点でのこと言えないけど。

それに、アーニャを改造したんだから同じ穴のムジナ。

『女なら犯りたい放題じやねえか! つらいやましいねっ!』

『まあな。ただ、結果を出さなきゃいけないがな。しかも、処理道具として実際に使わないと駄目だし、調査が入るらしいがな』

『面倒だが問題ないんだろう?』

『おやうぐな…………』

なるほど…………介入決定。ハッキングをかけて細工をする。

『まづい、燃料がマシントラブルかしらねえが、流れ出てやがる。
補給しなきやまづいな』

『大丈夫なのか?』

『ああ。近くの町に寄る』

『了解した。連絡はしておく』

チャンス。

「アーニヤ、近くの町に先回りして」

「了解…………」

モルドレッドの速度で輸送機を追い越して、町へと急ぐ。

町に着いたら、モルドレッドをボソン・ジャンプで基地に戻してお
く。

『少し時間がかかるから、一いつひで休憩してきな』

『分かった』

『よし、着陸だ』

音が乱れてから、正常に戻った。どうやら、無事に着いたみたいだ

な。

『また後で』

スーツを着た男が輸送機を降りて町に出たのを飛行場の監視カメラで確認して、近づく。

「マスター、観られてる」

「え?」

周りを見ると視線が集まっている。そうだよね、街中にドレスと着飾った騎士のようなコスプレをしていたら仕方ないよね。

「あそここの服屋に入ろう」

「うん」

私とアーニャは、急いで店に入り服を購入する。

購入した服は私がTV番1~3話のエピローグで奏が着ていたの。アーニャがこれまたエピローグのオレンジ畑を育てていた時の服を選びました。

「目標は?」

「大丈夫、ここから大通り600メートル先の交差点を右に曲がった先にある喫茶店に入った」

「ありがとうアーニャ」

アーニャがほんの少し虚空を見詰めた後、私の質問に答えてくれた。おそらく、この町に設置されている監視カメラの映像を傍受して解析したんだと思う。

「ゼロ、便利

「確かに……」

私達は、煉瓦が敷き詰められた中世のよつな町並みの中を走り、目的の喫茶店に入った。

「いらっしゃい。これは可憐ひしいお薬なんだ」

入った瞬間、コーヒーのいい匂いがして来た。

「『』注文は?」

「ブラック、後はマスターのオススメで」

「私はケーキ」

「はいよ」

カウンターに座って、周りを見渡す。すると、田標がない。
……アーニャが何も言ひてこないとなると、まだ中にいる。

「ちよっと行ってくる」

「こつてちよつしゃい」

私はトイレに向かう。

トイレの中には二人の気配があった。

私は男子トイレに入る。

「ちよつ、お嬢ちゃん、ここ男子トイレだよー?」

これはハズレ。

「中にはいました? 探してるんですけど……」

「ん~、いたよ。直ぐに出て来るだろうし、外で待ってな」

「はい、ありがとうございます」
男の人と外に出て、私は扉の前で待つ。

少しすると、水音が聽こえて来たので構える。

「ふう…………えつ?」

出て来た男を確認した瞬間、ガーデスキルバージョン1で剣を作り、
男の胸を突き刺しトイレの中に押し込んだ。

「がはつ…………な、何を…………」

「貴方に怨みはありません…………有りましたね。仕方ないとはいって、
あれは私の傑作の一つだったんですから」

「く…………そ…………」

「お休みなさい。良い夢を…………」

「アーニー、ドアに鍵をかけて、男を奥に引きずる。

「名前はケイ・イズミ……… 生体データをスキャン

持ち物を漁り、全てを回収したら、調度スキャンが終了した。

「変化」

Anderson Playerを使って、肉体をケイに作り変える。

「よし、問題無し」

鏡でいろいろ確認してみる。問題は服だけです。

「死体は処理して来ましょ」

ボソンジヤンプで死体を基地に運び、自動人形に血を綺麗に掃除させて終わり。私は返り血なんか受けていない。

「ただいま」

「お帰り」

「だきとるよ」

マスターの出したてくれたコーヒーを堪能しながら、アーニヤのケーキを少しもらい。

「あーん」

「うん、 いけるね」

「うん」

一仕事を終えた感じでお茶を終えた後、男の分を含んで、多めの五倍の金額を支払って外にでました。

次に、服屋で男の服を買つて、裏路地で変化を行い、確認する。

「問題ないよね？」

「うん、 大丈夫」

「じゃあ、これからアーニャはモルダレッドでしばらく待機をお願い」

「了解。 気をつけて……」

「うん」

私はアーニャと別れて、輸送機に搭乗した。

第八ラボに着いたて、諸々の手続きが終了し、試験を受けさせられた。

「ケイ・イズミ君。君は素晴らしい！ ランクBの研究員の資格が与えられた。ランクBは個人の研究室とモルモットが一体与えられ

る

「は」

「モルモットのリストはこれだ。どれも処女、童貞だ」

表示されたリストには、番号、顔、性別、年齢、身長、体重など様々な事が書かれていた。

「この中から、好きに選んでいいんですか？」

「うむ」

私は、リストの中にあつた目的と明らかにおかしい少女を選択する。

「では、ナンバー256とナンバー868」

「了解した。ナンバー256番ステラ・ルーシュとナンバー868番ルリ・ホシノだな」

「はい」

これが神の言つてたサポートだろうな。

「研究員の健康管理のためもあるので、この一人は一ヶ月に一度確認があるから犯つておくよ！」精神が壊れていた方がマインドコントロールが効きやすいので、壊してもかまわんからな」

「了解しました」

「成果はホストコンピュータに送りておいてくれ」

「はい」

説明が終わったのか、研究室の鍵と地図を貰つて部屋に向かった。とりあえず、ルリとステラをしつかりと畜でみつ。

第八研究所1（後書き）

やつと艦長とメインパイロット一人めです

バトロワ

第八研究所の新任研究員ケイ・イズミになりました私は、届けられた二人を見る。

「こちらが、モルモットです。確認をお願いします」

二人の首輪に繋がった鎖を持つた係員の指示に従い、受領サインをする。

「それでは、失礼します」

邪魔者が居なくなつたので、改めて二人の幼い少女を見る。歳は私と同じ、八歳くらい。金の髪と水色の髪が印象的だ。そして、両手両足に手枷と足枷が、首には首輪とリードが付けられて痛々しい姿だ。

「さてと、私は……」

ケイも本当の名前じゃないし、本名もまづいよな……適當でいいか……む、あれは……あれ着せるならそれでいいや。

「君達のご主人様だ」

「「「」」主人様」」

二人は虚ろな表情で、マインドコントロールの刷り込みが行われたようだ。

「そう…………よし、外れた」

手枷や足枷、リードを外す。首輪は認証タグが付いているから、外したらまずい。

「次はこれに着替えて」

「うん」「はい」

一人に何故かあつたメイド服を渡すと、目の前で着替えた。少し、目線をずらしておく。

「着替えた」

「着替えました」

「じゃあ、まずは…………」

それから、私は二人の身体検査、運動など仲良くなる事を重点的に行つていった。

ここに来てから一ヶ月、予定通りステラとルリの二人は懐いてくれた。

まあ、二人に他の人がどういう扱いを受けているかなどを実際に見せて教えたから、かなり楽でした。

後、アーニャを助手として招き入れた。当然、アーニャの人形は処理しました。

「二人共、覚悟はいいの？」

「はい。私の身体は既に改造されていますから…………構いません」

ルリはナデシコに乗る前、つまり、研究所にて弄られているところを召喚されて捕まつたみたい。ルリとしては、私に助けられた感じ…………特にアキトやコリカと会つていなかつた。

「ステラ、ご主人様好きだからいい」

ステラは愛情を与えて貰えなかつたからか、愛情を与えたたら簡単に墮ちました。

「それじゃ、やうづか」

「「はー（うん）」」

そして、二人を本格的に改造する。エブレイン、マシンチャイルド、ゼロシステムを標準装備。更にルリのエブレインは演算処理とゼロシステムにのみ特化させたら…………赤鳩みたいにできるようになつた。

ステラは左右の脳にエブレインが一個ずつになつた。これからは、ルリがオペレーター兼艦長の修行、ステラはひたすら高速戦闘の格闘戦に特化させた修行を行う。どちらもシミュレーターでだけどね。

培養槽に入った二人を観ていると、アーニャが報告に来た。

「マスター、ガンタンクの特許と開発報酬が出た」

この第八研究所の怖いところは兵器ならなんでもいい所だ。

「これで準備が整った」

「うん」

私はガンタンクによつてAランク…………つまり、ドックが一つ貰えた。

これによつて、研究所の付属施設ではなく、好きに使える私設ドックが手に入つたんです。

それから、早速ドックへ行つて盗聴、盗撮などを排除して儀式を行う。

「召喚するのは二つ。材料は腐るほどあるから平気

この第八研究所には怨念が満ち溢れているから、それをエネルギーとする。

召喚されたのはナーテシロヒと410m級重砲撃艦、ゴルンノヴァ。

「ああ、改造するよー！」

ちなみに、相転移エンジンはインフレーション理論で説明される真空の相転移を利用し、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させる事でエネルギーを取り出す。

ナデシコは、全長298m、全高106.8m、全幅148m、
総重量37,530トン、収容人員214名

410m級重砲撃艦ゴルノノヴァは、魔王の武器“烈光の剣”（これが「スレイヤーズ」の「光の剣」と同じものだとされている）にちなんで命名された。多数のビーム砲を装備し、空間を歪めての「空間レンズ」で収束して威力を高めたり、拡散させて広範囲を攻撃したりすることが可能。また、弾道が歪曲されてしまうため、リープ・レールガン以外の攻撃手段では有効打を与えることは困難。ただし、艦首の「目」付近だけは外部の様子を「見る」ために歪曲の対象外であり、ここが弱点となっている。

「IJの一つを融合させる。形のメインはナデシコで行く」

「うん。改造用に自動人形も呼び寄せた」

「ありがとうアーニャ。ルリとステラが培養槽から出られるまで結構時間がかかる（中で学習している）から、出て来るまでに頑張ろう」

「うん」

それから、私達は一艦を分解、融合させていった。

ロンドンの街中を楽しそうに歩く銀髪の少女、その隣にいる男性。その少女に同じく銀髪の少女がぶつかった。

「つーー？」

「マスターつーー？」

男性と少女は驚いた。なぜなら、彼女は胸を後ろからぶつかった少女の腕から伸びた剣によつて貫かれていたのだから。

「まず一人」

「カナデ、なぜだつーー？」

「坊やだからや…………そして、貴方もいらない…………」

男もあつさりと殺され、再起動したのか、周りからも次々と悲鳴があがつた。

「全く、ザビ家なんて…………」

その少女の言葉は続かない。なぜなら、彼女の頭は突如飛来した弾丸により吹き飛ばされたのだから。

その現場から800メートル離れた先にあるビルの屋上。そこには、先程の少女とその殺されたもう一人の少女とそっくりな少女がいた。

「ミッションコンプリート……………これで私は勝者に近く……………」

少女……………ハーモニクスのカナデは先程使ったアンチマテリアルライフルへカート?を肩に担いだ。

「油断大敵だよ……………私……………」

「つ！」

ヘカート?を担いだカナデは首筋から、盛大に血を何も盛大噴き出した。

そして、何も無い空間から血塗られた刃を伸ばしたカナデが現れた。

「ミラージュクロイド……………便利ですよ?」

「そうだね。髪の毛を金色にした徹底的だしね」

「早いですね……………」

屋上の給水塔に座つた同じカナデが存在した。

「私も狙つていたからね」

「そう……………」

「じゃあ、はじめようか……………」

お互にガードスキルを起動して、人間が出せる速度を超えた斬り合いが始まった。

数時間後、残つたのは金色に染めたカナデ。

「強かつた…………」

カナデは身体中の至るところから血を流して、死にかけているのが一目瞭然だ。

「…………」にいたら…………まことにジャンプ…………

彼女は生き残るため…………彼女は適当に転移した。

「あら、大丈夫ですか？」

「…………」

「これはイケませんね…………お父様、いらっしゃりですっ！」

バトロワ（後書き）

力ナデVS力ナデでした。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨ー（前書き）

すいません、一話目の投稿が出来ていませんでした。
だから、投稿
しなおしておきました。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！

Side ???

目が覚めた私の目の前には知らない天井がありました……………こ
こはどこ？ 確か私と同じハーモニクスと戦つて勝つて……………危
ない所をジャンプしたはずですよね。

改めて周りを見渡すと、綺麗な花々が咲き誇る庭園でした。
先程の天井は天蓋かな？

「あっ、気が付きましたか？」

ピンク色をした少女……………見覚えはないです……………この人が助
けてくれたのかな？

「はい……………」

掛かっている柔らかい布団を口元まで引き寄せて、少女を見つめる。
いつでも攻撃できるように……………私はまだ死ぬ気は無いですから。

「それはよかったです。もう、一週間も眼を覚まさなかつたので心
配いたしました」

「一週間……………」

とりあえず、安全みたいなので私のステータスを確認しましょう。

ステータス	
技術レベル	6
開発レベル	7
操縦レベル	4
戦闘レベル	8
経営レベル	1
肉体レベル	7
召喚レベル	4
魔力レベル	1
召喚回数残り	14
錬金術使用回数残り	12

肉体レベルが上がっているし、魔力レベルが増えているのかな？
召喚回数は、私自身がミラージュコロイドの発生装置で1回使つて
いるから、倒した人達の分だと思います。錬金術も同じだと思います。

「あの……大丈夫ですか～？」

「はい、大丈夫です。ここはどうですか？」

「ここにはプラントにある私の家ですわ。あつ、申し遅れました私は、
ラクス・クラインと申しますの。貴女は？」

「私は……」

このままカナーテと名乗るのはまずいです。特にオープと関わるラク

スさんにだとかなりますいです。

辺りを見渡すと鏡の中に一人の少女の姿がありました。

「コーリ?」

「コーリさんと重いつのですね」

「いや、違つ…………」「あつ、お医者様を呼んで来ませんといつ……言つちやいました……」

鏡に映つたのは碎け得ぬ闇、システムR、紫天の盟主
コーリ・エーベルヴァインでした。

『ちゃおー、金髪だつたから氣分的にその姿にしといたよ。感謝してね』

この神様は…………面白ければなんでもいいのかな?

『イグザクトリイ! あつ、ちゃんと紫天の書も用意しといたよ』

という事はあの三人娘もいるんですね。

『あつ、コーリ・エーベルヴァインの名前で住民登録とかしておいたから感謝してよね。あつ、面倒が無いように孤児として設定してあるからね。バイバイ〜』

その言葉を残して神様は帰つて行きました。

「おいで、紫天の書…………」

呼ぶと全体が紫色で、真ん中に金色の十字があしらわれた本が現れました。

「一部を除いて内容は白紙…………あの三人は召喚でくないみたいですね」

書かれていたのは私の名前ヨーリ・ヘルベルヴァインと市民登録番号でした。

「…………」

「IJのお嬢さんですか…………」

それから、ラクスさんが連れて来たお医者さんの診察を受けました。

お医者さんの最初の診断結果は、栄養失調による氣絶だったらしいので、栄養の高い点滴を入れられていたから、もう大丈夫みたいですね。

「それで、お家が無いんですか?」

「はい…………両親は死んでしまって…………」

「(めんなさい)…………」

実際、間違つていません。私達を産んだ両親は私達が殺しましたから。

「そうですね!」

「なつ、なんですか？」

いきなり大きな声にびっくりしちゃいました。

「貴女、私の妹になりませんか？」

「…………」

後ろ盾には一度いいけど…………途中で反逆者になるよね…………でも、それまでにザフトで高い地位にいればいいだけだよね。

「はー。よひしくお願ひし…………わふっ！」

ラクスさんに抱き着かれて、凶器に挟まれましたの。

「私、妹が欲しかったのです」

それから、私はコーリ・クライインとなり安定した生活を手に入れた。まあ、ラクスお姉ちゃんの襲撃さえなければですけど。お姉ちゃんの抱き着き癖はどうにかしてほしいの。死ぬほど苦しいから…………あの柔らかい肉の塊は敵です。

私がラクスお姉ちゃんの妹になつてから一年、九歳になつた私はお父様にプラントの技術部に連れていって貰いました。

「これはクライン議員、どうしましたか？」

「すまんね…………娘がどうしても見学したいと一年くらい言つて
いてね。一応、上の許可は貰つてあるよ。すまんが、ようじく頼む
よ」

「はあ…………わかりました…………」

「ようじくお願いします」

スカートの裾を掴みながら、頭を下げて笑顔でお願いしました。

「わっ、わかりました！ 後でサイン下さーーー！」

私はお姉ちゃんと違つて、ネットアイドル…………//クちゃんみたいに歌っています。

「まあ、後は任せたよ…………私は仕事があるのでね。ユーリ、迷惑を掛けないようにな」

「はい、お父様…………迷惑はかけません」

今日はお父様が技術部の上層部と会談するつこでこつこで来ました。

「では、ひかりんわ」

そして、私は研究員さんについて行きました。

ゲストパスを預いていった先は、何やら慌ただしく人々が働いていました。

「ひらがな食料生産プラントについて研究している場所です」

「ふむふむ」

説明を聞いていると、爆発音が聞こえて来た。

「何事だつ！」

「MSの動力炉開発部で爆発です！ 空いている人は手を貸してあげて！」

ジンかな？

「すいません、お嬢様…………安全が確認出来るまでひらがなに座りお待ちください。ひらがな警備員もこりますから」

「わかりました。ひのパソコンで遊んでもいいですか？」

「お好きにひづれー」

研究員さんは去つて行つたので、私はパソコンの前に座つてゲストログインしました。

「これは食料生産プラントの設計シミュレーションドですね」

起動した画面に有つたアイコンをクリックして起動させたのはショムニーションでした。

「んと、ひるを弄つて…………ひらがなプログラムを書き換えて……

.....」

OSから構造、部品まで作り替えて..... 時間を忘れて作り上げました。

「うん、これで完成かな？ 生産数は四倍、生産速度も三倍増えてるし..... 評価はS..... やつた」

「ほう、素晴らしい出来だ」

「え？」

慌てて後ろを振り返ると、仮面を付けた金髪の人がいました..... カツコイイです..... この人はまさかのあの人はではないですか？

「すまない、驚かしてしまったようだね。私はラウ・ル・クルーゼという者だ。見ての通りザフトの人間だ」

今はザフト成立から一年ですから、この人は20歳ですね。私とは11歳です。

「ラウ様、私はコーリ・クラインと申します。よろしくお願ひします」

「よろしく。実は君の父上、クライン議員から君の護衛と案内を頼まれてね。クライン議員はどうやら、お仕事が長引くようだね」

時計を見ると、素手に一時間が経過していました。

「わかりました。よろしくお願ひします」

立ち上がりながらとしたら、手を差し出されたので、手を取つて、立ち上がらせて貰いました。

「行く前にこのデータを提出してもいいかね?」

「はい、どうぞ」

「では、提出者コーリ・クライン……………送信……………では、行こ
うかお姫様」

「はい」

あれ?

何かまずい気もしますが気にしなくていいよね?
うん、気の性氣の性。

ラウ様に案内されながら、色々な所を回りました。

「これであらかた回つたが……………どうするね?」

「ラウ様、モビルスースが見たいです」

「ラウ様は止めて欲しいのだが……………まあ、私のバスでは君を通
せ無いんだ」

ラウ様には敬語を止めいただきました。

「そうですか……………でも、私のバスは何処でも入れますよ?」

「ちょっと確認させてくれ……」

「どうぞ……」

「…………あの親バカは…………」

ボソッと呟いた言葉に、ラウ様の気持ちが窺っています。

「どうやら問題無いようだね。では、行こうかお姫様

「はい」

連れて行つて貰つた場所にはジンが三機ありました。

ジン

型式番号： ZGMF - 1017

所属： ザフト

全高： 21 . 43 m

武装：

M M I - M 8 A 3 7 6 m m 重突撃機銃

M A - M 3 重斬刀

M 6 9 バルルス改特火重粒子砲

M 6 8 キヤツトウス500mm無反動砲

M 6 6 キヤニス短距離誘導弾発射筒 × 2

M 6 8 パルデュス3連装短距離誘導弾發

射筒 × 2

スナイパーライフル

紫天の書のページにこんなのが浮かびました。

「おひあこです…………」

「あひらには新型があるな」

あひらにはシグーポーに骨組みがありました。

「ん～～」

「どうした？」

「ジンにしても、シグーにしても性能が低いですね」

ガンダムを見てこるとそう思こますよね。ザクより下なんですから。

「新型機を低いと言われてもな…………」

「あれ？ 子供の戯れ事と思わない？」

「あのシユミレーショーンを見せられたら、お姫様をただの子供とは思わないね」

「なら、賭けをしませんか？」

「何を賭けるんだ？」

「お互い、勝つた方の言つ事をなんでも聞くといつ事。勝負はモビルスーシングのシユミレーショーンです」

「いいだろ？ だが、ハンテはあげよ！」

「でしたら、私は自分の機体を使いますね」

「あるのか…………まあ、いい」

それから、シユミレー・ションルームに移動して、私はジンの代わりに今の姿にある意味ピッタリな機体を紫天の書からロードしました。

シユミレー・ションに入つて、シートベルトを無理矢理締めて……問題がありました。

「手足が届かないっ！？」

『どうした？』

「すいません、ちょっと待つてください」

『わかった』

私は首筋からエブレインのコードを引き抜いて、シユミレー・ションシステムに突き刺して、キーボードを取り出してOSを書き換えた。

作業時間は10分くらいです。

「お待たせ…………しました」

『いや、構わないよ。ステージは宇宙にしておいた』

「はい。お手柔らかにお願いします」

『フフ、それはわからないな』

ラウ様が消えて、発射シークエンスに入りました。

「いへ言つ時は…………コーリ・クライン…………出ます!」

私は初めてのMS戦に挑みました。相手はラウ・ル・クルーゼ様……相手に取つて不足はありません。

Side Out

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！（後書き）

タイトルの闇ちゃんは碎け得ぬ闇の闇ちゃんでした。

ザフト編？ クルーゼとの戦い

Side ラウ・ル・クルーゼ

私はモビルスーツの訓練データを渡す為に技術部に来ていたのだが、行きなり現れたクライン議員に、娘の護衛と案内を頼まれた。面倒だと思ったが、今の私では逆らう事も出来んし、訓練所に戻つても暇なだけだから仕方なく受けた事にした。

「と言う事なので、戻るのが遅くなります」

『了解～～ところで、クライン議員の娘さんってどっち？　歌姫ラクスちゃん？　それとも超レアな碎け得ぬ闇ちゃん？』

「後ろのは名前ですか？」

『ネット場で歌ってるラクスちゃんの妹、ちびっこ歌姫コーリちゃんのハンドルネームね』

どうでもいいな。歌など私には必要無い。

「コーリと聞きました」

『マジでっー？　今すぐそっかに行くわっ！』

『ダメだつー？　おまえは仕事があるだらうがあつー？』

『んな事より闇ちゃんに決まつてゐるでしちうがつー！』

『それは同意だが、誰も開けられねえんだよつー！？』

『くつ…………クルーゼ、命令よ！　闇ちゃんの写真を撮つて、それにサインを貰つて来なさいつー！』

『あつ、俺の分もな。貰つて来なかつたら一ヶ月…………いや、三ヶ月食事抜きに罰掃除な。じゃ、ようしけつー！』

教官共…………大丈夫なのか？

病院を紹介した方が良いかも知れん。

それから、私は彼女のいる場所に向かつたのだが、そこに居た少女は異質だつた。

彼女の手は震む程の速度でキーボードを打ち込み、食料生産プラントのシミュレーションデータを作り上げて行く。

その内容を後ろから覗き見ると、設計思想が根本から違う上に、表示されている生産量と速度は以上な値を示していた。

「やつた…………評価はひ…………」

「ほひ、素晴らしい出来だ

私の声に驚いて振り返つた少女に自己紹介して、案内を開始した。先程の事もあり、私は彼女に興味が出て来た。

案内するにつれ、軍事機密を子供に見せるクライン議員の親バカつぶりに切掛けたが、お姫様の「要望通りに案内してあげた。

しかし、このお姫様は私に様を付けるんだ?
何度も言つても止めてくれない。

「ジンにしてもシグーにしても、やっぱり性能が低いですね」

「最新型を低いと言われてもな……」

お姫様は驚いた顔をして、私に何故子供の戯れ事と思わないのか聞いてきたが、あのショミレーショーンを見れば、ただの子供のはずが無いのは誰でもわかるだろう。

そんな話しをすると、お姫様は賭けを申し込んできた。私もサイン付きの写真を手に入れる為に丁度いいと思つて賭けを受けた。

そして、今…………ショミレーショーンの中で表示された敵を見て、私は楽しくなつて来た。

「これはまさに異質。モビルスーツの枠を超えているぞお姫様っ！」

私の目の前に映し出されたその姿は、地球の島国日本の真紅の『鬼面』を想起させる機体で、両肩に鬼面のようなパーツが浮遊し、まるで禍々しい鎧をまとった太古の存在であるサムライのような外見をしている。唯一の携行武器として腰には刀のような形状をした物を装備している。

『ラウ様、行きます！』

「来たまえっ！」

その瞬間、私は自身の勘に従つて急速離脱を行つた。私が先程まで居た場所には、深紅の機体と振り下ろされた刀が存在した。

「速さは段違いだな！」

M M I - M 8 A 3 7 6 m m 重突撃機銃を放つが、鬼面のよつな物が盾となつて防いだ。

「まずいっ！」

急降下を行い、鬼面の口から放たれた深紅の光はジンの片腕を容易く溶かして、消滅させた。

「勝ち目が無いか？ いや、まだM 6 8 キヤットウス500mm無反動砲がある！」

これは本来戦艦相手に使う物だが、お姫様の機体は正真正銘の化け物だ。これでもたらんどううな。

「全力で接近するっ！」

バルデュス3連装短距離誘導弾発を放つて、おそらく、自動防御であろう鬼面にガードさせて、キヤットウス500mm無反動砲を鬼面の至近距離から全弾放つ。

爆発と閃光が支配する中、私は更に急降下と急旋回を行い、背後に

回りながらカードリッジを交換し、背後からキャットウス500m無反動砲を放つ。

「これでどうだっ！」

『させませんっ！？』

お姫様は、振り向き様に超高速で刀を振り、500m無反動弾を全て切り裂いてみせた。そのため、私は重斬刀を引き抜いて突っ込んだが、お姫様の刀に容易く重斬刀を切られた。

「だが、まだだ！ まだ終わらんよっ！」

急上昇して、重斬刀とジンの下半身が持つていかれたが、接近する事が出来た。

「喰らえっ！」

少し残った重斬刀を、深紅の機体の頭に突き刺してダメージを与えた瞬間に、ジンは爆発した。

ショミレー・ションから出た私は、先程の戦いを思い出す。確かにお姫様の言う通り、ジンなどでは相手にならない。最初の一撃以外、動いてすらいないのだからな。

「お疲れ様でした。私の勝ちですね」

「そうだな。それで、お姫様の願いは何かな？」

あのような機体を出されても、私の負けには代わりはない。

「それじゃあ、ラウ様…………私の物になつてください！」

顔を真っ赤にして爆弾発言をしてきた少女を見る。

「君と私は歳も離れているし、今日会つたばかりなんだが？　君は賢いから、自分が何を言つているかも理解できるだろ？？」

「はい。一目惚れという奴です？」

「いや、聞かれてもこまるんだが…………」

「私の物になつてくれたら、ラウ様の老化を止めてみせます」

「何故、知つている…………」

お姫様の発言により、私は殺氣を持つて対応する。

「それは私がラウ様と似たような存在ですから。私はスーパー・コーディネイターの次の作品、ルナティックの分身体…………いわばコピーやクローンのような存在です」

成る程、奴の関係者か。

「能力は分裂する前までなら、完全にオリジナルと一緒にです。そして、私達は誰が主導権を握るか戦っています」

「成る程、私を戦力にしたいのか」

「はい。もちろん、ラウ様が好きと言つ事もあります。ラウ様にとつても、悪い取引では無いと思いますよ？ ラウ様の病を治すだけじゃなく、更に強力な力……スーパー・コーディネーターを超える力を渡せます」

「フハハハハ！」

「ラウ様？」

「いいだろうお姫様。私は君の騎士となるう。ただし、まずは質問だ。私のオリジナル…………奴は生きているのか？」

「私達が殺しました」

ならば何の問題も無いな。

「では、私の病を治してくれれば構わない」

「わかりました。準備がありますので、明後日にでも私の家に来て下さい」

「了解した。あつ、頼まれ事があつてね。お姫様の写真とサインを二個くれないか？」

「ちょっと待つてくださいね…………」

簡単に貰えたな。

しかし、これからお姫様の様な存在と戦えるのは楽しみだな。

「はい、どうぞ。あつ、携帯を貸してください」

「何に使うのかね?」

私から携帯を受け取ると、私の腕に抱き着きながらジャンプして頬をにキスした瞬間、シャッターが押された。

「何をするのかね?」

「これでよし…………はい、どうぞ」

返された携帯の待ち受けは、先程の写真になつており、ロックまでかけられていた。

「電話番号も登録しておきましたので、よろしくお願ひしますね」

お姫様は、そう言って走り去つた。その先にはクライン議員が見えた。

「これから大変だな。しかし、もし老化が止まるなら、レイの分も頼むとしよう…………」

そして、私は訓練所へと戻つた。

ザフト編？ クルーゼとの戦い（後書き）

はい、クルーゼさんが簡単に負けすぎかも知れませんが、機体性能とパイロット能力を考えるとどうしようもありません。脳内にゼロシステムがあるので、ここまで性能差……勝てるはずありません。

ちなみに、ステータスの最大は9までです。
ラウやキラの覚醒は操縦8とかそんなレベルです。

ザフト編？ 魔改造と今更な説明

Side ユーリ

帰ってきた私はネットに鎮の少女を流して、家族三人でご飯を食べて寝ました。色々な準備は明日です。

次の日、お姉ちゃんの抱きまくらから抜け出して、秘密基地の使用申請を行いました。

次に、お庭で精神統一を行い、魔力強化を行います。これは、既に日課となっています。

なぜなら、私の機体…………ペルゼイン・リヒカイトは通常の機体エネルギーだけじゃなく、魔力を糧に動くようになっていました。おそらく、靈力も魔力に置き換わってるでしょう。

「ユーリ～～朝食ができましたわよ～～

「は～い」

私の左右に浮いている魄翼を解除して、紫天の書とエブレインにとって魔力負荷をかけてお姉ちゃんの所に向かいました。何度もこけたけど。

朝食は普通にサラダヒースト、スープです。

「さむせむ」

「ノーリ、零してますわよ～～」

お姉ちゃんに口元を拭かれて、恥ずかしきです。この身体になつてからちやんとい飯が食べられません。

「はい、あ～ん」

「あ～ん」

「一緒に、いつもお姉ちゃんで食べせせらります。」

「今日は一緒に買い物ですから、楽しみです」

「うそ、楽しみ」

今日は前々から約束していた買い物の日です。

「アツだな～～よし、お父さんがお小遣こをあげよ～」

「あつがとうござまわ」「あつがとう～～

渡されたのはブリックカード…………お小遣こってレベルじゃないよね…………お父様は親バカ。

私もラクスお姉ちゃんも変装して買い物に出かけました。

「あつ、こました。アスラン、」ひちですわー。」

「おはよー!ラクス。そつちの子がラクスが言つていたゴーリちゃんか?」

「そうですね。ゴーリ、こちから私は私の婚約者のアスランです。今日は荷物持ちを頼みました」

「い)苦労様です」

自)紹介を終えた後、三人でお買い物です。

「い)に入りましょ」

「うん」

「僕はい)で待つてるから」

「ダメですよアスラン」

「ちよつ……」

お姉ちゃんが入った店は、高級な女性服専門店です。

「これなんかどうですか?」

「いつ、いいんじゃないかな?」

何度も「」のやり取りが繰り返されています。

「なら、これにしましょ。次は、本命のコーリです」

「え？」

気付いた時にはラクスお姉ちゃんに腕を捕まれて、大量に用意された子供服がありました。

「まさかさつきのは…………私の油断を誘う為に？」

「だつて、コーリつたらいつも逃げるんですもの」

「アスランさん助けつ「すまん…………」ふええん～～

試着室に連れ込まれて、着せ替え人形にされました。
結局、買ったのは数着…………というか、なぜかあつたゲームの白い方の衣装です。どうせ、アンリです。

着せ替え人形にされた次の日、つまりラウ様との約束の日なのですか…………お父様とザラ議員に捕まりました。

「」の提出データはコーリの名前になつていてるけど、本当にコーリが作ったのかい？」

「何を言つている。IROや監視カメラの映像から「」の少女がアレを作ったのは間違いない」

「あの～～確かにこの生産プラントは私が作りましたよ？」

ラウ様が提出した奴ですね。止めるのを忘れていました。

「しかし…………信じられん…………あのコーリーが…………」

「クラインは無視していい。さて、今日ここに来た理由だが、このプラントを作る事が昨日の議会で可決された。そのため、君には現場監督と技術開発を頼みたい」

これはチャンスですね。色々条件を付けるべきです。

「条件付きなさいいですよ」

「ふむ…………内容次第だな。出来る限りの事はしよう」

「まずは、私をザフトに入れて、提督クラス権限を」「え、あらゆる行動の自由と一部隊を好きに動かせるようにしてください」

「こきなりそれか…………」

「次にモビルスーツの開発及び武装の開発…………」「ううは、私の自由に任せ、その技術をザフトに公開させない」と

「おい」

「大丈夫です。ジン以上の機体を作つて量産させてあげます

渡すのはザクですけどね。

「後は、私の部隊を持つ事と独自に私の部隊に組み込める任命権ですね」

「さすがにそれだけの権限は不可能だな…………」

「「ひからを差し上げても…………ですか？」

「これは…………」

ザクのデータとアルテミスの傘のデータを見せて上げた。

「素晴らしい…………」

「「」のまま食料プラントを作ったとしても、理事国は例え核を使用しようと破壊しに来ると思います」

「そんなはずは…………」

「彼等の中には私達コーディネイターを人と思つていらない連中がいます。人でない存在に氣にするはず無いです…………」

「そうだな…………どちらにしろ、これは保険になる。議会に掛け合つてみよう」

「まあ、後方に居てくれるならいいか…………コーリの人気も高いし…………」

「あつ、ザフトではコーリ・ホールヴァインとしてくださいね」

「めんなさい、思いつき前線に出ます。

「了解した。それでは、仕事に戻るぞクライイン

「わかった。それじゃ、またね」

「はい。よろしくお願ひしますねお父様」

「うむ、任せてくれ。ゴーリの為にがんばるぞ

お父様達を見送った後、次の来客が来ました。

「お邪魔するよ」

「いらっしゃいませラウ様」

「先程、議員にお会いしたが………… 食料プラントのことかね？」

「はい。交換条件で色々飲んでいただきました」

「わつか。それで、どうするんだね？」

「いらっしゃるのです…………ジャンプ」

ラウ様に抱き着いて、ボソンジャンプで基地へと転移しました。

着いたのは使用申請しておいた研究所です。

「これは素晴らしいな…………」

「とりあえず、老化など治しまじょ。」ひりの服に着替えて、培養槽の中にお願いします」

「了解した」

ラウ様が培養槽に入つたら、液体を注入して、身体データを呼び出して行う事を書いて行く。

「マシンチャイルド化とエブレイン…………強化人間はいらないですね」

「マシンチャイルドとエブレインについて教えてくれないかね?」

「マシンチャイルドはIFS強化体質を人為的に作り出した存在の事です。IFSは思考によつて機械を操作するシステムです」

「成る程」

「I - ブレインは、Informational - Brain（『情報を扱う脳』）の略であり、『情報の海』に干渉し、『情報の海』を書き換える生体量子コンピューター。情報の海と言うのは解りやすく言うと世界そのものです。そして、その力を使う存在を魔法士といいます。魔法士とは、脳内に「I - ブレイン」という生物学的に生成された生体量子コンピュータを保有し、上記の情報制御理論（世界を書き換える力）を用いて情報の海に干渉し「魔法」を使出来る者を指します。

たしか、正式名称はウイックテン・ザイン型情報制御能力者でしたね。特徴としては、常人をはるかに上回る身体能力を發揮したり、炎や氷の矢を投げつける、物質が生き物のように動き回り襲いかかるな

ど、能力は多種多様である。主に「騎士」「人形使い」「炎使い」の3種に分かれ、生産もこの3種が多いですが、これ以外にも「格外」と呼ばれる特殊な能力を持つた魔法士もいます」

「詳しい情報をありがとうございます。後は頼むよ」

多分、MS戦では騎士最強かもしません。パッシブで赤い水星ができますしね。

「では、お休みなさいませ……ラウ様にプレゼントを用意しておきますね」

眠ったラウ様を自動人形達に任せて、私はプラントに戻りました。

ラウ様が眠つてから一晩後、プラント最高評議会に呼び出されました。

「では、賛成多数で本件は可決された」

ザラ議員に大量のモナ力をプレゼントした事が効いたのかも知れませんが、私の要望は全て通り、ザフトの訓練所はジンからザクへと訓練が移行しました。

そして、ラウ様が眠つてから一週間……ユニウスセブンは着々と要塞化が進んでいます。完成は原作通り、C.E.69年……今から三年後です。

ミラージュコロイドと動力路を召喚して取り付けましたから、伸びました。でも、きっと大丈夫です。

「さて、ラウ様の機体を作りましょう。やっぱり、プロヴィデンス

.....キラ君とか涼田? やっぱり、ラウ様は仮面ですか? あれこしまじゅう「

ザクを生産ラインに乗せるのと、ラウ様の機体を作りましょう。後一週間で出て来るでじゅうから。

Side Out

ナフテ編？ パラセント（前書き）

明けましておめでたございます。今年もよろしくお願いします。

ガフト編？ プレゼント

ユーリ・S・ユーレ

ラウ様が目覚めたので、私は国費で作ってくれたラボにご案内いたしました。

「さて、お姫様からのプレゼントは何かな？」

「これです」

「ほつ…………これは素晴らしいな

ラウ様の前にあるの深紅の機体。

私がラウ様の為に用意したのは総帥専用機。

型式番号：MSN-04

全高：25.6m

頭頂高：23.0m

本体重量：30.5t

全備重量：71.2t

出力：3,960kW

推力：133,000kg

センサー有効半径：22,600m

推進機関姿勢制御：バー二ニア × 28

装甲材質：ガンダリウム合金、P.S.装甲

兵装

拡散メガ粒子砲

ビーム・ショット・ライフル

ビームトマホーク

ビーム・サーベル × 2

シールド

ミサイル × 3

ファンネル × 6

エフィールド

ディストーションファイールド

ボソンジャング

「機体名はなんだね？」

「ザザビーです。ちなみに、コクピットは頭部にあり、緊急時には機体から分離させる事が可能です。更にコクピットプロックには小型スラスターも内蔵されており、戦線を早急に離脱する事が出来るようになっています」

本来とは違う点は、動力路に相転移エンジンが追加されている事（両方小型化）、サイコフレームにチューリップクリスタルとIFS端末が混ざっている事です。当然、ファンネルにもIFS端末が組み込まれているので、思考による操作が可能です。

「見たことが無い武装が多いな」

「そつちも説明するね。まずは、ビーム・ショット・ライフル……これはザザビーの主兵装です。本体下部に散弾銃のようなグリ

ツプを備えています。約1.4メートルと、MSの全高に匹敵する大型の武装で、この時代の携行用ビーム火器としては破格の10・2MWの出力を持っています」

「待て、今現在では携帯用ビーム兵器は存在しないはずでは？」

「いえ、研究自体はされていたので、私や私達が完成させました。だから、私の機体ペルゼイン・リヒカイトも撃つたじゃないですか……」

「…………」

「（あればビームでは無い気がするが…………）そつか、続きを頼む」

「はい。」のビーム・ショット・ライフルは2つの銃口を持つてあり、それぞれ通常の収束ビームと拡散ビーム弾を選択発射出来ます。拡散ビームは広範囲を攻撃する事が可能で、接近戦時に有効だと思います」

「便利だな」

全くその通りです。さすが、赤い彗星の専用機です。

「次にビーム・サーベルです。これはグリップに伸縮機構を採用された標準的なビーム・サーベルですね。アイドリング・リミッター機能に対応しており、デバイスや出力等は一般的のMSに装備されているものと変わりません。ただ、ディストーションフィールドを纏う事も出来ます。収納場所は左右の前腕内側に各1本ずつ収納されているため、素早く接近戦に対応する事が可能です。」

そして、もうひとつビーム・トマホーク…………これは、近距離専用の接近戦用兵装です。ビーム・トマホークもしくは大型ビーム・サーベルとして使用出来ますが、本体のみでもヒートホークとして機能します。ビーム・サーベルよりも威力が高く、マニピュレーターで保持して使用する他に投擲武器として用いる事も可能ですね。大型ビーム・サーベルとしては広範囲に刃が形成される為に使い勝手に秀でていて、通常はこの形態で利用される事がが多いと思います。未使用時は柄を縮めた状態でシールド裏面に搭載され、スカート・アーマーに装備する事も可能です。標準的な機構であるアイドリンク・リミッター機能を備えています」

普通のビームサーベルは保険ですね。

「シールドは裏面にビーム・トマホークとマイクロミサイル3基を装備し、表面にはザフトの紋章が施されています。あと、他のザフトのMSが携行するシールド程の兵器架台化はされていませんよ。装甲に使用されている物と同等のガンダリウム系合金とPS装甲が素材として用いられているうえに、様々なコーティングが施されています。腕部への固定箇所を中心にシールド本体の回転・スライドが可能であり、これによつて腕の動きを著しく制約する事を防ぎ、防御面を有効に活用する事ができます。

そして、強力な兵器である腹部に内蔵された拡散メガ粒子砲。ジェネレーター（相転移エンジンなど）に直結しており、そこから生み出される莫大なエネルギーを利用する為威力は高く、本機の火器の中では最大の火力を持つています。ビームが拡散するため攻撃範囲も広いので、一撃で複数のMSを撃破したり、デブリなどの岩盤を粉々に粉碎する事も可能ですが、ジェネレーター直結式である為パワーダウン時は威力が大幅に低下するので気をつけてくださいね。砲口の左右からは胴体に沿うようにエネルギー供給用ケーブルが伸びているで、被弾しないようにお願ひします」

吹き飛んじゃうかも知れませんしね。

「ああ、気をつけよ!」

「最後にトリックキーな兵器、ファンネルです。これは、背面の2つのファンネルコンテナに3基ずつ、合計6基を格納しています。ビーム砲の威力の高さや稼働時間の長さからも結構安定しています」

「思考による操作か……難しいが慣れればいいか」

「お願いしますね」

「ああ、この素晴らしい機体に見合ひう力を手に入れて見せよう。ただ、一つお願いがある」

「なんですか?」

「なんでも聞いてちゃいますよ?」

「機体のカラーリングを銀色にしてくれ」

「…………分かりました」

「すまんな。どうも、嫌な予感しかせんのでな」

「はい…………」

カラーリングを銀色に変更して終了ですね。

「あつ、訓練所に行きましょう。私もザフトに入ったので、頑張つて訓練しなくちゃいけないんです」

「では、お姫様のエスコートは私がしょい」

「はい」

私はラウ様と一緒に初めての学校へと向かいました。

ザフト訓練所はプラントの外れにある一区画を丸々使っています。そのため、かなり巨大な施設となっています。

当然、セキュリティもある程度しつかりして……ないみたいですね。だって、その道のプロなら侵入出来そうですね。『ロロニー』の五人なら簡単に。

「ヒヒが教官室だ」

「はい」

まずは教官さんに会いに行かないといけないよね。

「失礼します」

中に入ると、女性がヒヒたちを見て固まりました。

「ゆ、ユーリ・クラインだとつー?」

「本物だつ!」

男性もいました。

「違います。コーリ・ヘルヴァインです」

「ダウマー」

「残念、掛金は親の総取りです」

「マジで？」

「は」

正解はわかりますよね？

「おかしいな、書類ではコーリ・クラインはコーリ・ヘルヴァインとして登録すると書いてあるんだが？」

「やうね」

「正解は田姓なので、嘘ではないから私も私です」

「反則だ～～」

ばれてるみたいなので、ぱりじかやこました。

「教訓、仕事をしてください」

「フウじゅん、一応話しあは聞いてたから、アンタの部屋はちゅんとあるよ」

「そつちでは無く、お姫様の入隊に関してです」

「そつちは問題ねえぞ。評議会の決定だから、最優先で揃えてある

「だから、後は手続きだけね。はい、これ

女性から渡されたのは契約書でした。ただ、私のは色々特別ですけどね。

「あと、赤い服か白い服で、ザフトの紋章が付いている物を持つてたら、とりあえずならなんでもいいっていつてたわよ」

「なら、このままいいですね」

今のは白いバージョンの服ですから。

「んじゃ、お姫様の案内と身体検査と行くか。ラウも来い」

「了解しました」

「よろしくお願ひします」

それから、施設内の案内と私の身体能力などを計りに行きました。

今は検査が終わり、MSのショーラーテーに向かっています。

「しかし、とんでもねえスペックだな……」

「ええ、正にコーディネイターのお姫様ですね」

「能力判定が全てA以上を超えてやがる。だが、問題は操縦技能だな」

どうやら、私の潜在能力は歴代最強らしいです。でも、現在ならいっぽいいますよね。

「ナチュラルの糞と共に撃ち殺してやつたぜっ！」

「俺達コーディネイターにかかればナチュラルなんて雑魚だ雑魚。ギャハハハハ！」

話している間にショミレータームに着いたみたいですね。

「すまんな～～どりも、ナチュラル軽視の傾向が蔓延していいな……
どうにかしないといけないんだがな…………」

「教官、私の知り合いのナチュラルを呼んで、鍛えてもらいましょうか？」

「ナチュラルか……そいつは強いのか？」

はい。たった一人でこの訓練所を制圧できるくらいには強いです」

「ほう……そいつはコードィネイターの味方になつてくれるか？」

「コードィネイター、ナチュラルなどの差別はしませんが、私の個

人的な味方だと思つてください」

「なら、頼む。ぶっちゃけ教官不足なんだよ。ラウみたいに全員が優秀ならいいんだけどな」

「私は優秀では無いと思います。優秀ならレイがそうでしょう」

「まあ、アイツもそうだな。とにかく、不足して休みすら無いんで使える人材がいるならなんでもいいから頼む」

「では、直ぐに連れてきます」

「おひ

それから私達はシュミレータールームに入つて、そこにいた人達をボコボコにして、操縦技能を見てもらいました。私の技能は一般兵よりは上で、エリートよりは下でした。

その後も色々案内してもらい、与えられた豪華な部屋で眠りにつきました。

ナフコ編？ プレゼント（後書き）

サザビーの名前を変えるか悩み中です

ザフト編？ 嘘ばれた二人（前書き）

ヒイロ達にするか悩みましたが、この二人にしました。

ザフト編？ 嘘ばれた二人

朝起きたら見慣れない天井が写りました。どうやら、寮にある私の部屋のようです。

部屋は4LDKでとても広く、家具は高価なインテリアで揃えられていて、とても訓練生が住む部屋ではありません。

「朝、」はん……

冷蔵庫からカロリー・メイトを取り出してカリカリと頂いた後、エプロンを駆使して盗聴機やカメラなどを排除します。

「26個…………何時もよりは少ないけど…………」「マジックミラーが仕掛けられているね」

マジックミラーはカーテンを取り付けて塞いでしまいます。

「これで準備完了だけど、先にシャワーを浴びよう」

風呂場も広いのでいい感じ。

身体を綺麗に洗つたら、着替えて一室に向かい、紫天の書を片手に持ち、パイロットと機体のセット召喚を二回行いました。

「いいはどこだ？」

「私達は火消しの風として働いていたはずだが…………」

長い銀色の髪をしたカツコイイ男性（仮面無し）と黒い髪のキリッとした女性が現れました。

紫天の書には白いトーラスとトールギス？が保存されました。

「すいません、私が貴方達を呼びました」

「ふむ…………召喚か」

「頭の中に直接知識が流れ込んで来ますね」

追加説明をして、お二人には納得して頂きました。

「なるほど、君が私達のマスターとなる訳か」

「そうです。構いませんか？」

「私は問題無い」

「教官の仕事は久しぶりなのだが、ゼクスと一緒にならむしろ楽しみなので引き受けよう」

「ありがとうございます。少しだけ機体データを用意してあります」

リビングに案内して、携帯端末を渡して確認してもらいます。

「ザクか」

「ザクですね」

スパロボから召喚したかいがあったのか、直ぐに把握してくれました。

「「コーヒーですがジ'うわ」」

「ありがとう」

「頂きます……これは……」

「まざいな」

「あうっ」

ゼクスさんにダメ出しされました。

「ゼクス……」

「これは豆がいいのにかなり勿体無いな。それに、早く直した方がいい……ノイン、頼む」

「そうですね。ユーリ、私と一緒に入れましょう」

「はい」

キッチンへと案内したんですが、ノインさんは難しい顔しました。はい、かなり散らかっています。

「そりいえばユーリはお嬢様でしたね。生活能力ゼロな訳ですか？」

「……」

「「」めんなさい…………」

何時も使用人がやつてくれるから、やつた事が無いのです。転生前の記憶なんて、もう無いにひとつですから。

「責めてはいませんから、安心してください。何、私が今日からスバルタで教えてあげます」

「ひつー！」

恐いっ！ 何故か凄く恐いです！

「まおは」「コーヒーからですね」

いつの間にか、キッチンは綺麗に片付いています。

「始めはドリッパーにフィルターをセットし基準量の粉を入れて、軽く搖すつて表面をならし、軽く押さえます。

次にお湯は沸かしたてを使用してください。沸騰後1分位待つと抽出の適温になります。

そして、粉の中心に、湯を細く置くような気持ちでゆっくりと注ぎます。深煎りほどゆっくりと細くお願いします。

ポイントは、縁には絶対に注がない事、一度に大量の湯を注ぐと、粉が湯に浮いてしまい旨みの抽出を嫌つてしまい、雑味の多い味になります。先程のコーヒーの失敗はこれでもあります」

知りませんでした。

「粉が湯を吸収して中心部から次第に膨らんできます。全体の60%位に湯がまわる程度を用意に注ぎ、30秒位は注ぎ足さずよくな

じませることで、「コーヒーの組織が拡がり湯を受け入れる準備ができます。この時、まだサーバーにコーヒーが落ちないようにしてくださいね。

次に中心から外に向かい、の字を描くように、細くゆっくりと注ぐのです。ムース状に盛り上がった状態を保ち、平らになる前に次の湯を注ぎます。

コーヒーが落ち始めたら、縁にかかるないように周辺にもゆっくりと注ぎます。の字をやや大きくするといいですね。およそ3投目、約45秒位でサーバーにピタピタと、ゆっくり落ちてくるのが理想です。

サーバーにコーヒーが落ち始め、しばらくするとフィルターが下の方からジワジワと均等に滲みてくるといい感じです。中心からクリーミーな泡がドンドンと出できますよ。この通りです

「確かに泡がたくさんです」

「このポイントは、お湯の角度を垂直に、粉の状態をよく観察し、イメージを大切にしてください」

「はい」

「予定の抽出量に達したら、すぐにドリッパーを降ろします。ポイントは粉がくぼむ前に必ず降ろす事です。雑味が落ちる前に終了しまじょう……これで完成です」

美味しそうな香りがします。

「まだまだ奥深いですが、頑張って覚えましょうね」

「はい」

「では、ゼクスの所に戻りましょう」

「んしょ…………」

「（なんだかゼクスとの子供を育てている感じになりますね。やっぱり、私も欲しいです）」

私達はリビングに戻り、美味しいコーヒーを飲みました。そして、食事の件でまた怒られました。

それから、二人を教官室に案内しました。

「その二人が昨日言っていたナチュラルの知り合いか？」

「そうです」

教官室には昨日案内してくれた男の人がありました。

「私はゼクス・マークスだ。こちらが私のパートナーのルクレツィア・ノイン」

「ルクレツィア・ノインです。ノインとお呼びください」

「俺はイズミだ。もう一人、フェリカと言う奴がいる。俺達がこの訓練所を取り纏めているから、俺達以外は覚えなくともいいぞ」

「はい」「了解した」

私はあまりいいから良いと思つけど、一人はびくするんだひつ。

「部屋はびくする？」

「それなんですが、ユーリの生活能力が問題なので私達はユーリの部屋に住みたいと思います」

「わかった。確かにお姫様に一人暮らしは無理だろうな」

「食事がカロリーメイトやサプリメントとだけなのは驚いたな」

「作れないし、太るし面倒なんですよ…………仕事（？）もありますしね。」

「ねえわ…………身体壊すぞ？」

「大丈夫です…………多分…………きっと？」

「あ～～ノインさん、頼むわ」

「はい、任せてくれ」

「酷いです…………身体の不調なんて無理矢理…………あれ、ユーリ・エーベルヴァインの身体なら、食事とか必要無いんじゃないですか？　エグザミアもあるし…………怖くなつたので止めます。

さて、お二人には私の世話をソフトの意識改革を期待しましょう。

ナデシコ^{ノワール}と侵入者

Side カナデ

元の姿でドックに籠つて一年、ようやくナデシコ^{ノワール}が完成しました。

ナデシコ^{ノワール}

分類：重砲撃制圧艦

艦級：ナデシコ級

所属：なし

建造：カナデ・コラ・アスハ

全長：350 m

推進機関：相転移エンジン六基、反物質エンジン二基

システム

ワンマンオペレーションシステム

生体エネルギー変換システム

IFS

ボソンジャンプ制御ユニット

重力制御システム

ナノマシン生成システム

オモイカネ

ディストーションフィールド発生装置

ミリージュコロイド発生装置

自己再生システム

武装

ディストーションブласт

ゴルンノヴァ × 500

装甲

ガンダニコウム装甲

PS装甲

オリハルコン装甲

形はナデシコを大きくして、装甲を真っ黒にしただけです。ゴルンノヴァ発射時には装甲版が多数開いてビームを発射します。MS発進ゲートは左右の前と後ろに有りますが、発進はボソンジャンプによる転移になります。

防御はディストーションフィールドと重力場歪曲による攻撃誘導とPS装甲による物理攻撃無効などです。

攻撃はディストーションブластとゴルンノヴァの重力場による拡散と収束の攻撃と、ルリちゃんのハッキングによる全域制圧ですね。整備などは自己再生システムとナノマシンにより艦載機の自動修復などもありますから、本当にルリちゃん一人でいけてます。

どう考へてもアクセラレータの極悪戦艦です。

「私に扱えるでしょうか……」

メイド服のルリちゃんが不安それにしています。

「ルリちゃんなら大丈夫。オモイカネや私達もいるから

「そうですね…………」

「それに、失敗してもダメージなんて入らないだろ？し、ハッキン
グがばれても私達には誰も追いつけません」

アーニャにわざわざ火星まで跳んで貰つて、制御ユニットを持ち帰
つてもらつたのですから。

「分かりました。頑張ってみます」

「じゃあ、早速だけど、中に入つて何時でも発進できるように動作
確認とかしておいてください」

「はい」

ルリちゃんがナビシロに乗り込んで行つたので、私は最終チェック
クに入ります。

『マスター』

脳裏に無表情だけど慌てているみたいなアーニャの顔が写し出され
ました。

「どうしたの？」

『上の第八ラボに侵入者』

「確かにここは第八ラボの地下にあるけど、セキュリティは桁違い
だよ？」

『侵入者はこの三人』

アーニヤの顔の横に、茶髪の長髪をおさげにした全身真っ黒な少年と黒い髪と緑の瞳をした少年、フードで顔を隠した子供の姿が現れました。明らかに盗撮のアングルですけど気にしません。

「これは…………デュオ・マクスウェルにガロード・ランですか……確かにまずいです…………いえ、チャンスです。アーニヤは監視を続けてください」

私は召喚回数も鍊金術回数も使い切っていますから、そろそろ攻勢に回らうと思っていた所です。

『了解』

「ルリちゃん、聞こえる?」

『はい』

「ナデシコは問題無い?」

『全システムオールグリーンです』

なら、大丈夫かな。

「今から第八ラボの回りを徹底的に調べて、MSを見付けて」

『了解です』

MSを先に確保すれば問題無いよね。

「Jさん事もあらうかと、用意しておいた迎撃システムの出番」

椅子に座つてコソソールに接続する。

「行け、ソードブレイカー」

迎撃システムとして用意したのはアッシュ・ショセイ・ヴァーの武装です。形はファインファンネルと同じだけど性能はこっちの方が上です。だってファンネルなのにB武器ですからね…………狩りの始まり。

Side Out

Side Out

俺はティファとのデート中にいきなり召喚された上に、俺を送り返せないから、自力でティファの召喚ポイント分を稼がないと一度とティファには会えないと脅して来やがったので、改造されても仕方なく従つている。

「ちつ、観られてやがる…………ガロード、油断すんじゃねえぞ」

「ああ」

「こいつはデュオ。俺と同じく召喚された奴で、これまた同じく同棲している女性がいるそうだ。

デュオと俺は召喚されたせいか、この少女には逆らえない。そのため、こいつはかなり人使いが荒い。

『次の角を右に曲がって、三番目の部屋に対象はいます』

「わかった。フェルトはそのまま監視を続けていろ」

『はい』

通信をして来たのはフェルト・グレイスって言つ可愛い女の子だ。確か14歳と聞いた。この子はアイツの玩具にされそつた所を何度か助けたおかげで、俺達の仲は良好だ。

「うーか……ガロード、頼む」

「おー、任せろ!」

「動くなよ……」

「そつちに向くへりいはいいですか?」

針がねでちょいちょいとイジクリルと鍵が開いた。俺は素早く中に入り込み、銃を背後を向いている人影に突き付けた。

「ああ」

俺は振り向いた女の子の姿に我が眼を疑つた。

女の子の身体はボロボロで、性器などが人目で壊されているのが見える。

「なんなんだよこれっ！」

「どうしたガローブ…………」「いつはひでえな

俺はジャケットを脱いで、女の子に掛けてあげた。

「優しくですね…………」

「いや…………見ちまつて悪かったな…………」

「いえ…………」

「何をしている

アイツが遅れて入つて來た。

「お久しぶり」

「そうだな…………待て、その身体は…………しまったっ！」

「もう、遅い」

「「え？」

女の子が指を鳴らすと、ドアが閉まって隔壁まで降りてきた。

「くそつ、アズラエルに差し出した人形かっ！ まだ処分して無か

つたのかオリジナルめ！」

アイツが女子に向かつて銃を発砲するが、女子は普通に言葉を続いている。

「影武者としては最適だと思ひナビ、どうかな？」

「おいおい、嬢ちゃんの身体は機械だぜ…………」

撃たれた場所に穴が空いていて、そこから身体の中が見えた。

『ガローデ、デュオ、急いで戻つて…………ううん、絶対帰つて来ない…………』

「何があつたんだ！」

「フルート、応答しろー。」

「オリジナル、貴様の仕業か…………」

その言葉に俺達は首だけになつた女子を見る。

「簡単な事、貴方達の機体が必ず近くにあるとふんだ私は周辺を調べさせて、アーニャに襲わせて機体とオペレーター…………フェルトさんを確保しただけ」

「無事なんだな？」

「うん」

「よかつた

俺とデュオは心の底からそう思つた。

「ちつ、役立たずめ

「なんだと…」

アイツの言ひ草に、俺はアイツを殴りついたが、デュオが止めに入つた。

「よせつて、どうせ無駄なんだからな。それより、脱出方法を考えよ」

「くそつ……」

「脱出なんてさせませんよ」

女の子の首がさう言つと、ダクトが内側からビームのような物で破壊され、部屋の中に何かが侵入して来た。

「ソードブレイカーか……」

「さて、さようならのお時間が来たみたい。最後にデュオ・マクスウェル、ガローデ・ランの両名には選択肢をあげる。このまま自由になるか、私に従うか……好きな方を選んで」

「フルトはどうなるんだ?」

俺の答えはデュオの質問の解答しだいだな。

「フェルトは私に従う。それがフェルトが私に提示した条件だから」

「なら、俺はアンタに従う。ここでフェルトを見捨てたら、ティファに顔向けできないしな」

これが俺の答えた。

「確かにそうだな。いいぜ、俺もアンタに従ってやる。どうせ、今までと変わらないからな」

デュオも同じ答えみたいだ。

「貴様等…………」

「わかった。それじゃ、さよなら私」

「ふん、ハーモニクスを使う時精々気をつけるんだな」

その言葉を最後に、アイツはビームに撃ち抜かれた。それと同時に部屋の中に転移して来たアイツと同じ姿の女の子が現れた。

「いいネブレイド…………回数も余ってるし、当たり…………」

アイツが光りの粒となって、食べられるように女の子の体内へと消えた。

「痛つ」

「大丈夫か?」

「うん、令呪が私に入つて来ただけだから」

「デュオの心配も杞憂みたいた。」

「それにしても、御人形も壊れちゃつたからここも潮時かな……
うん、デュオ、ガロード」

「なんだ?」「ああ」

「おー一人にお仕事だよ。」の施設を明朝までに完全に破壊して欲しいの。地下施設もだけどできる?」

「ガンダムさえ有れば…………サテライトキャノンで終わりだけど

……」

この世界にドームつてあんのか?

「ドームは…………召喚出来るのかな? 試してみよつ…………ち
よつと行つてきま…………「待つてくれ」?」

本当にわかつて無いみたいだな。

「宇宙にそのまま行く氣か?」

「あつ…………」

「ドジつ娘か? そもそも、ラボの動力炉を暴走させればどうじで
もなるつて」

確かにデコオの通りだ。

「なり、お願ひしますね」

「おひ

「まへ、せひせひせひ

そして、俺とデコオは女の子…………カナデが始めた研究者狩りを手伝つて、モルモットにされていた子供達を救出した。どうやら、カナデが薬を提供していたみたいで、そこまで酷い事にはなつていなかつたので安心した。

ナテシコと侵入者（後書き）

ガローデとデュオな感じはつる覚えなので崩れていても勘弁してください。

機体はヘルとDXです。デュオとガローデはエンドティング後からしばらく立つてからです。

デュオはエンドレスワルツより。
フェルトは1st前になります。

プレゼントは私

デュオ達と別れた私はナデシコに戻った。

「ただいま…………」

転移した場所はブリッジ。

「お帰りなさい」

ルリちゃんが優しく出迎えてくれた。ちょっと嬉しい。

「格納庫にガンダムタイプのモビルスーツが一機と客室でお客様がお待ちです」

「わかりました」

それから私は客室に向かった。

客室にはピンク色の髪をした可愛らしい少女がいた。

「デュオとガロードは無事ですか?」

「 もちろん、無事です」

「 んっ」

フェルトに抱き着いて、その柔らかい二つの山を堪能しつづけ、思考が変な所に逝ってしまいました。

「 ガローデとデュオはこちうに残る事を決めましたが、フェルトは私のものですよ」

「 うん…………あの一人が無事ならいいよ。どうせ、お父さんもお母さんも死んで私は一人だから…………あつ」

暗いし重いです。でも、抱きしめてくれるのは気持ちいいかな。

「 ?」

「 お願いがあるんだけど…………いい?」

「 何?」

「 ガローデとデュオの彼女も本人の意思を確認して、呼んでほしい」

本当にフェルトは優しい。

「 そのつもりだから安心するといいよ…………」

「 よかつた…………んんっ！？」

フェルトと口づけをして、ベットに押し倒しました。

うん、胸の感触に我慢できなかつた。身体は女、心は男だから。

フルトさんとイチャイチャした後、格納庫に行つた。

「お帰りなさい」

「ただいまアーニャ…………何してるので？」

度の入つていな眼鏡を掛けて、白衣を着た小さな少女がいた。

「改造？」

ガンダムデスサイズ・ヘルカスタムとガンダムダブルエックスの前で、作業機械を動かしながら小首を傾げるアーニャ。

「既に魔改造されてるんじや？」

「まだまだ甘い…………ちゅろ甘？」

「いや、知らないけど…………」

「ヘルカスタムとダブルエックスは出力と装甲しか改造されて無い」

それはダメかな。

「だから…………ヘルにはスラッシュ・シャーシステムとミラージュコロイド、ボソン・ジャンプシステム…………羽は取り外し可能にして、

シールドビットにしてみる「

スラッシュャーシステムはゲームの刃を回転させながら飛ばすみたい、シールドビットはサーバーニャみたいななの？

「ダブルエックスは…………わからない…………」

「ニコータイプ用のシステムがあるし…………マイクロウーブ送信施設も無いから…………待つて、相転移システムを応用すれば、直接エネルギーを供給出来る？」

「だぶん、いける？」

助手のアーニャと見解は一致した。なら、後はやるだけ。

「ダブルエックスの羽とサテライトキャノンにエネルギー供給回路を作つて…………でも、肝心のエネルギーはどうするの？」

「ん～～しばらくはナデシコから供給して…………つん、やっぱり本拠地を作る。どう考へても、ナデシコの性能を発揮しきれない」

「わかつた。とりあえず、改造する」

「よひじく

改造はアーニャに任せ、私はブリッジにいるルリちゃんに連絡を取る。

「ルリちゃん、搬入作業が完了しだいボソンジャンプの発動準備をよひじく

『炉の暴走と同時に合流ポイントに転移して、回収ですね』

「うん。準備が終わつたら、アズラエル財団のハッキングと私と同じ姿の人達を探して欲しい…………」

『了解しました』

さて、私はプレゼントの用意。

深夜、動力炉の暴走を確認した私達は合流ポイントに転移して、デュオ達と合流した。

「　「　「お疲れ様」」」

「　「　「おつかれ」」」

ブリッジで簡単な挨拶と自己紹介をした。

「しかし、こんなでかい船で乗組員がこんだけって…………

「一人で動かせる戦艦がコンセプトですから…………

「無茶苦茶だな」

デュオの意見には同意する。ちなみに、質問に答えているのはルリちゃんです。

「ガロード、デュオ」

「ん?」「なんだ?」

物珍しそうに見ている一人…………ガロードの眼は何が変だけど、
気にしてない。

「プレゼントがありますので、どうぞ」

可愛らしく包装された大きな箱を一つ、彼等の前に差し出した。

「なんだろ?」

「嫌な予感しかねえが、開けるしかねえ…………行くぞガロード
!」

「おう!」

二人が同時に箱を開けた瞬間、デュオは吹き飛ばされ、ガロードは
盛大に鼻血を噴出した。

「あつ、ゴメンデュオ…………つい…………」

「ガロード大丈夫?」

中から出て来たのは一人の少女。その格好はまさに私がプレゼント
…………つまり、裸にリボンを巻き付けただけなの。

「ティファ、その格好は…………」

「ガロードがこの格好だと喜ぶつて…………」

「ぐつ、その通りだ…………」

「ガロードのエッチ…………」

「こつちは概ね大丈夫みたい。もう一方は…………大変そう。とりあえず、デュオが死にそうになつていた。

「ヒル^テ…………ひでえぞ」

「じめん、つい…………」

「バカばつかです」

ルリちゃんのあの台詞が聞けた。

「まあ、部屋を用意したから好きに使って…………」

「ああ…………」

「行^ハう…………」

デュオはヒル^テに連れられて、ガロードはティファを連れて行きました。

ちょっとやり過ぎた？

「ん…………」

「アーニャ、何してるので？」

「記録？」

小首を傾げて可愛くしてるので、盗撮だよ？
そのエブレインに写っている映像はガロード、ティファの部屋とデュオ、ヒルデの部屋だよね？

「まあ、いいかな…………」

それから、全てを一旦忘れて、ゆっくりと休みました。

次の日、食堂に集まつた私達はある問題に悩んでいた。

「で、大浴場、露天風呂、大森林公园、海水浴場、リクリエーションルームに売店など、かなり場違いな施設があるので、コックと医者がいないってどういう事かしら？」

「「「忘れてた」」」

「（）飯は力口リーメイトじゃないの？」

久しぶりにショミレーターから出て来た…………出したステラが、
そんな事言つてきた。

「…………とりあえず、（）の中で料理が出来る人は？」

ヒルデさんが聴いて来たけど、私、ステラ、ルリ、アーニャは手を
挙げずに眼を逸らすしかなかった。訂正、ステラとアーニャは興味

無じと叫ぶ感じで、エブレインを使ったショミリーションで戦いだしている。

「俺はサバイバル料理なら出来るぜ」

「俺も」

「ビツセテコオと同じレベルでしょう。フェルトやティファは?」

「一般的には出来ます」

「勉強中です…………」

ティファのはガロードのためだよね。

「なら、基本的に私とフェルトで作るか。ティファはサポートしながら覚えてね」

「はい」「はい」

一人が元気よく返事をして、次の議題に入りました。

「医者はどうするの?」

「私達、魔法士はエブレインにより身体のデータが管理されていて、病原菌の駆逐や身体の温度調整などを自動でしてくれるから、よほどの事が無い限り病気にならないよ。例え大怪我しても、培養槽に入れば治るよ」

「それはアンタ達だけでしょ! だいたい、軽い怪我でそんなの使

つてたらコストと時間がかかりすぎでしょうがっ！」

「い」もつとも…………

お医者さんと料理人さんの確保が大事ですね。

「じゃあ、私のハーモニクス…………分身達を頑張って狩つて行きましよう」

「それはそれで、怖いよな」

「確かに」

「この話はここまでです。次の案件について報告を受けましょう。

「ルリちゃん、報告は何かある？」

「はい。アズラエル財団を調べた結果、四ヶ所の軍事基地に隠し財産がある事が見付けました。警備はかなり厳重ですが、モビルスーシなら問題は特にありません。しかし、軍事基地の幾つかにご主人様…………力ナデ様と同じ姿のハーモニクスが確認されました」

「つまり、強力なモビルスーシが出て来る可能性もあるって事か？」

「そうなると難易度が跳ね上がるな」

デュオとガロードの言う事はもつともかな。警備はガンタンクがメインだから、たいした事無いと思うけど、私達が召喚するパイロットやモビルスーシは英雄クラスの強力な存在だから、存在するだけで難易度は跳ね上がる。

「目的はアズラエル財団の隠し財産だけだ、ハーモニクスを発見しない、ナデシコをそこに投入して、基地もひとも跡形も無く消滅させようと思つ」

「その場合、俺達はナデシコの護衛でいいな？」

「はい。フルートさんはルリちゃんのサポートをお願いしますね」

「わかった」

「これでナデシコは問題無いし、次はステラかな。

「ステラはもう一機のダブルエックスを使ってね」

「うん。ステラ、頑張る」

もう一機のダブルエックスはティファの召喚時に付いてきた。Gビット付きでね。Gビットはガロードのダブルエックスに付けます。

「第一部隊はアーニャ、第一部隊はデュオ、第三部隊はガロードとティファ、遊撃にステラとルリちゃんかな。ヒルデさんの操縦技術は低いから、子供達の世話をお願ひ」

「リーオーじゃ話にならないから仕方ないわね。そっちは任せても

「あ

「ティファにはエブレインを付けさせて貰つて、エブレインで他人の悪意とかをカットしちゃおうと思つます」

「ぜひ、ティファのためにも頼む」

「はい、お願ひします。私はガローディビリでも一緒にいたいです
から……特に戦場ならなおさらです……」

「ティファ……」

「ガローデ……」

ダメだ、二人の世界を作ってる。

「二人は放置して、作戦を練りましょうか……」

「うん」「ああ」「はい」

そして、私達は襲撃計画を立てて準備を始めました。

何故かモビルスーツより怖いアーニャヒルリ（前書き）

今回はデスサイズヘルとダブルエックスのデータに加えて、誰がどんなエブレインを持っているかを説明します。

何故かモビルスーツより怖いアーニャヒルリ

作戦開始前にどうにかダブルエックス一機とデスサイズ・ヘルカスタム一機の改造と、ティファ、ガロード、デュオ、ヒルディ、シンチャイルド化、エブレインの作成の目処がついた。その中でも、ティファは魔法士の中でもレアな天使…………同調能力と呼ばれる特殊な能力が使えるエ・ブレインを手に入れました。

このエブレインはあらゆる魔法士の中でも特出したエ・ブレインの容量を持ち、一般人はもちろん、たとえ魔法士が相手であっても行動の一切を支配下に置け、情報を読み取ることも可能。その代わりに痛覚なども全て受け取ってしまう為、支配した相手を攻撃する事は出来ない。

同調能力の詳しい力はエ・ブレイン内の巨大なメモリ内に対象の情報すべてを取り込み、情報の側から支配する。ただし、痛覚もファードバックされるので攻撃には使えず、あくまでも足止め用である。医療などにも応用が利く。特殊なデバイスがない限り効果範囲は自分を中心にして一定の半径内であり、かつ無差別に支配下に置くので遠距離には向かない。さらに領域内の情報量が多くなると当然ながらエラーを起こして停止してしまうため、ある意味で最大の敵は数を頼みにした一般兵・群衆と言えます。

どう考へても、ティファとルリちゃんに相応しいエブレインかな。これは頑張つてルリちゃんに一個目のエブレインをあげるべきだけど、例外を除いて一つしか手に入らないので、ステラのエブレインを解析して技術力をあげなきゃいけない、頑張ろう。

「うん、デスサイズヘルが仕上がつた」

「うん」

デスサイズヘルカスタムの現在の仕様はこうなつている。

ガンダムデスサイズヘル（EW）

Gundam Deathscythe-Hell

型式番号：XXXG-01D2

全高：16.3m

重量：7.4t

出力：6,009kW(30000UP)

推力：105,380kg(30000UP)

装甲材質：ガンダニュウム合金、PS装甲

武装

バルカン×2

ビームシザーズ

アクティブクローグビット

システム

ハイパー・ジャマー

ミラージュコロイド

ボソン・ジャンプシステム

スラッシュ・シャーシステム

ディストーションフィールド

搭乗者 デュオ・マックスウェル

動力は相転移エンジン一基を搭載し。そのため、短距離転移ならある程度自由に出来るようになりました。

しかも、デュオ本人は騎士の魔法士だからかなり強い。

魔法士の騎士はかなり強い力を持っている。

一つ目は情報解体。これは物質を情報の側から破壊する。情報の側から破壊された物質は原子単位で分解されるから防ぐのが大変。原則として单一分子で構成されている物質（石、金属など）は情報的にもろく、思考・演算する物質（生命体・コンピュータなど）は情報的に強固である（現実世界とは正反対の性質を持つていることになる）。魔法士は情報の塊であり、解体はほぼ不可能な存在。

二つ目は身体能力制御。これは運動能力と知覚速度を加速できるの。最高レベルの騎士が最高レベルの騎士剣を使ったとしても、運動速度の加速度は100倍が限界。不自然な動作から発生する衝撃などを打ち消す演算も必要であり、運動能力を加速し過ぎると、反作用で体を壊してしまつ。そのため、使用者は高速で動きつつも運動エネルギーは普通に動いているときと変わらない。なお、いくら加速しても蓄積する肉体疲労は通常と全く変わらない。

三つ目は騎士が最強と言われるゆえんの自己領域。光速度（光速度を越えることは不可能だけど、光速度の値そのものは改変可能である）、万有引力定数、プランク定数を改変し、自分の周囲の空間を「自分にとって都合のいい時間や重力が支配する空間」に改変する。重力制御による空中移動と並行して亜光速（エ・ブレインの能力・騎士剣の性能により差が生じる）で動ける為、他者からは「瞬間移動した」と見えて、近接攻撃の際に能力を解除しなければならない事。また、二つの自己領域がぶつかり合うと互いの自己領域の境界面に矛盾が発生して強制終了する。

「つまり、ミラージュコロイドで消えて、ボソンジャンプで施設内に侵入し自己領域で対象に接近し情報解体で目標を殺し、ボソンジャンプで帰還…………完全な暗殺者？」

「デュオの騎士剣は鎌とデスサイズヘルそのものでいいよね」

「うん」

騎士剣は、騎士の能力を補助する剣型のデバイス。この形状は情報解体が通用しない人体への攻撃を目的としている。刃はミスリル製で、柄に演算中板の結晶体が象嵌されている。「身体能力制御」による加速度はこれの演算を使用することで大幅に上昇し、また自己領域の展開プログラムは騎士剣に搭載されているため騎士の強力さはおおむねこの騎士剣に頼っている面が大きい。

「普段は腕輪にしておいて、予備として小さな髪留めに偽装しておけ」

「隠しておくには調度いい」

アーニャも賛成してくれた。

「眠いけど次に行こ」

「うん」

私達はこのままダブルエックスの仕上げに入った。

三時間後、明朝六時にガンダムダブルエックス一機の改修が終了。

「自己領域がなかつたら危なかつた……」

既にアーニャは寝かしつけた。本作戦に私はいらないから。
ダブルエッグスはこんな感じになつた。

ガンダムダブルエッグス

Gundam Double X

型式番号：GX-9901-DX

分類：サテライトシステム搭載型MS

所属：新地球連邦軍 フリー・デン カナデの私兵

生産形態：ワンオフ機

頭頂高：17.0m

重量：7.8t

装甲材質：ルナ・チタニウム合金、PS装甲、オリハルコン

武装

ツインサテライトキャノン

ハイパー・ビームソード×2

DX専用バスター・ライフル

ブレス特朗チャード×2

ヘッドバルカン×2

ディフェンスプレート

ロケットランチャーガン

G・ハンマー

ツインビームソード

ビームジャベリン

ガンダム型ビット

システム

フラッシュ・システム

サテライトシステムMK?
ディストーションフィールド
ボソンジャンプシステム

搭乗者ガロード・ラン（サポートー・ティファ・アティール）、ス
テラ・ルーシュ

こちらも動力炉はヘルと同じ。しかし、羽…………リフレクターに相転移システムを使ってサテライトキヤノンに直接チャージする事に成功。だけど、チャージに時間がかかるので、他から供給出来ない限り、何発も撃てない。ボソンジャンプも同じ。

「ガロードも騎士だから、騎士剣はライト…………サイブレードにしておく。後、デザートイーグルでいいよね…………うん」

ついでだから、ルリちゃんのエブレインの能力も説明する。

ルリちゃんの能力は未来予測。超高速演算によつて短期的な未来を完璧に予測出来る。ただし、いくら予測が完璧であつても、速度や体勢などの原因で「理論的に回避不可能な攻撃」に関してはどうしようもない。欠点は、相手の攻撃方法を知らないと対応しようがないため、能力の分からない相手に対しては使えないことと、敵が二人になると負担が2倍以上になること。簡単に言えばゼロシステムの上位版の力を持つている。

次に破碎の領域（Eraser circle）

空気分子の動きを正確に予測し、そこに音による変化を加えることでバタフライ効果によつて論理回路を形成する。この論理回路は騎士の情報解体と同じ能力を有し、なおかつ騎士のものより解体する力は強い。起動するにはルリのエ・ブレインの機能の75パーセントを超高速の演算装置として使用しなければならない（ティファの

600倍の演算速度が必要）為、情報の海へ接続する能力と大きなプログラムを保存できる程の記憶領域を持たない、演算に特化したI・ブレインを持つルリちゃんにしか使えない。論理回路の大きさは約50cm。また、情報の海へ接続するわけではなく、厳密にいえば魔法ではないため、ノイズメイカー（電磁雑音放射デバイス。一定パターンの電磁ノイズを放射することで魔法士の情報制御を阻害する、対魔法士用兵器）の影響下でも使用が可能（予測演算さえできれば使える）とされている。

最後の虚無の領域（Void sphere）は破碎の領域の発展型。形成した論理回路が新しくひとまわり大きな論理回路を形成し、その形成された論理回路がさらに大きな論理回路を……という具合で指数関数的に論理回路を巨大化させ、最終的に自らの大きさに耐えられなくなつた論理回路が周囲の物質を巻き込んで自壊することによってありとあらゆる物質を確実に解体する。論理回路の大きさは調節可能であり、最大（ナデシコの演算つき）で直径約30km。欠点は一度起動するとI・ブレインが過負荷でオーバーフローし、3時間以上の休止時間が必要な点。その間は一切I・ブレインを用いる能力が使えなくなる為、まさに最後の切り札と言つべき技。

「未来予測とナデシコ……オモイカネに搭載されているゼロシステムと合わせると戦闘空域でもかなりの予測が出来るみたいだから、積んでおこう」

「当然、皆のエブレインにはゼロシステムが搭載されているの。

「ステラは双剣と言われる特別な魔法士」

双剣は騎士の一種で「規格外」の魔法士。本来一人につき1つしかないエブレインを右脳と左脳に一つずつ持っているため、自己領域と身体能力制御の同時起動を行うことが出来る。そのため、騎士の

弱点である「自己領域から身体能力制御への切り替えのタイムラグ」がない。ただし並列処理中は身体能力制御の加速度率が若干低下する。また、二つのエ・ブレインに別々の身体能力制御を処理させることで通常の騎士の上を行く移動手段も使える。

「だから、色々調べる。アーニャは光使い」

光使いの力は時空制御で、空間を歪曲する事で攻撃を回避する「*Shield*」と、局所的に閉鎖した空間で光や原子、分子を加速して荷電粒子砲のように撃ちだす「*Lance*」がその代表例である。なお、「*Lance*」は光の速さで迫つてくる為、いかなる魔法士であつても発射を認識してからの回避は間に合わない。射出を予測出来た場合は別だけど。

D3.....光使い専用外部デバイス。正式名称*Dimensional Distortioning Device*（訳：次元歪曲装置）。外見上は正八面体の透明結晶で、表面全体に論理回路が刻印されている。光使いの能力は自分の周囲しか操作できないため、戦術の柔軟性を高めるために作られた。D3自体も空間の隙間に出し入れすることが可能。ぞくに言う四次元ポケットを持つている感じ？

光使いの正体は、時空制御特化型魔法士。遠距離戦闘・対艦戦闘のスペシャリスト。*Lance*で戦艦だって沈めちゃう、歩く恐怖の戦術兵器アーニャちゃん。

「ルリちゃん」とアーニャが組んで、砲撃したら田も当たらない……

……

未来予測とアーニャの砲撃……百発百中の光の雨が降り注ぐ……

勝てないよね。

「救いはD3が巨大化してない事かな……したら、サテライト

キヤノンの連射が来る感じになるのかな…………うん、止めよう

大人しく寝よう

私は格納庫にある仮眠室で眠りに付きました。

何故かモビルスーツより怖いアーニャヒルリ（後書き）

アーニャ：光使い

ルリ：空族（名前不明）

ステラ：双剣

ガロード：騎士

デュオ：騎士

ティファ：天使

ヒルデ：未設定

カナデ及びハーモニクス達：悪魔使い×2（サクラと鍊の奴）

ちなみに、カナデ達のエブレインにはプログラムが入っていないのが多い。AngelPlayerで事足りるために、そこまで研究していない。

精々、自己領域と身体強化しかしていません。これから使いだすかもしれませんけど。

アーニャSide 元家政婦は見た！（前書き）

なぜだ、MS（NZK）戦のはずが…………書き終わると魔法士の戦闘がメインになつてました。

アーニャSide 元家政婦は見た！

Side アーニャ

私が今いる場所はイタリアにあるアズラエル財団の施設軍事基地。身体強化とボソンジャンプで簡単に侵入出来た。

「ハハハ、異常無し」

『わかりました。そのまま地下に向かって下さい。その施設の警備システムは全て掌握していますので、警備兵には気をつけて下さい』

「了解」

ルリとの通信を繋げたまま、エブレインに取り込んだ見取り図に従つて地下へと下りて行く。

空間歪曲で私の姿は見えないから、ぶつからないように気をつけねばいい。

地下に行き、隠し通路を進んだ先にコンクリートで塞がれた区画があつた。

「ハハハ？」

『はい。そこに数十億ドル分の金塊があるはずです』

「了解…………おいで、D3」

三十センチメートルくらいの正八面体のデバイスを、隙間から取り出して、最小の出力で広範囲にLanceを放つ。すると、コンクリートや合金で守られていた壁はあっさりと消滅して、入口が出来た。

「金塊が沢山」

目の前には山と積まれた金の山。私は気にせずに中に入った。すると、警報がけたましく鳴り出した。

『そこは別系統な上に、外部から物理的に遮断されていたみたいですね。』めんなさい』

「大丈夫、先に回収する」

金塊を全て隙間に仕舞つて、D3を十三個呼出し、私の周りに六個配置する。残りの五個は迎撃、一個は隠しておく。

「いたぞっ！」

大量の兵士が直ぐに駆け付けて来たので、指差してD3に命令を送る。

「Lance」

指示を出した瞬間、D3の一つから光りの槍が放たれ、通路にいた大量の兵士を文字通り跡形も無く消し飛ばし、通路の後ろの壁も消

滅させ、外へと続く道が出来た。

『あつ、ここにムルタ・アズラエルが来ているみたいですね』

「なら、挨拶して帰る」

『了解しました』

私は面倒なので、自動識別モードとゼロシステムを使ってオートで、D3を起動させました。そのお陰で、私に向かってくる兵士は死に、飛んで来る銃弾はD3のShield（空間歪曲）によって全てが完全に防がれています。

「ばけ…………」

「助け…………」

私の邪魔をする者は容赦しません。だから、すんなりと進んで行きます。

そこは豪華に彩られた貴賓室。そこに奴はいた。私は今、天井裏からアイツ等を見ている。

「何事だ？」

「アズラエル様、基地に何者が侵入したようです」

「馬鹿な、警備は何をしていた！？」

「それが、施設がハツキングされたようで、こちらの操作を一切受け付けません」

ルリの手腕は見事。あの部屋は仕方ないし、無警戒に踏み込んだ私の責任だから。

「使えない奴め…………死ね」

アズラエルが兵士の一人を銃殺した。

「報告します！」

「なんだつ！」

「ひつ！」

「早く報告しろー。死にたいのかつー！」

「はいー。金庫の中身が空っぽになっていますー！」

「ふざけんなつー？ 死ねつー！ くそつ、くそつ、第八ラボといい、なんでこんな事になるんだつー！」

新たに撃ち殺した兵士の頭を何度も何度も踏み付け、八つ当たりをするアズラエル。

「いいか、なんとしてでも取り戻せ！ さもないと、貴様等全員を

殺してやるつー！」

「「「「はーつー。」「」」

残っていた兵士も慌てて外に出て行き、アズラエルと一体の死体だけが残つた。

「おい、お前も行つて来い！　お前なら侵入者を簡単に排除出来るだろ！」

虚空に向かつて、アズラエルが大声で叫んでいた。やつぱり、危ない奴。

「ボクがいなくなれば、君は侵入者と一人つきりになるけど、それでいいのか？」

と、思つたら実際に声が帰つてきた。

「なんだとー？」

しかも、感づかれているみたい。これはまずい。

「何故わつわと言わなかつた！」

「ボクの仕事は君の護衛だ。いくら連邦の士官とはいえ、私設基地の事まで介入する理由は無いね」

「貴様つー？」

「ボクを動かしたいなら、護衛とは別料金だ」

「く……六百万出すから始末しろ」

「一千万ドルだ。鏑一文負けない」

「わかつた、払う！」

「了解」

その言葉と同時に私はチャージした十三個全てのD3から、部屋全体にLanceを放ち、部屋中に破壊の光りで満たした。

「なんだこれはっ！？」

「危ないね」

結果は失敗。信じられない事に、アズラエルの前にいきなり現れた小さな少女がLanceを刀で切り裂き、破壊の光りを防いだ。その少女は水色の髪の毛をショートにして、東洋の民族衣装を着ている。さらに、目隠しまでしている…………よく斬れたと思つ。

「驚いた…………いくら神刀を騎士剣にしたとはいえ、D3のLanceまで情報解体神出来るとわね」

相手は騎士の魔法士みたい。

「助かったのか…………？」

「一応かな。ボクもいきなり、部屋事破壊するとは思わなかつた。未来予測どゼロが反応しなければ死んでいたね」

ハーモニクスか喚ばれた英雄さん？

「『』の様な暴挙に出たのはあそ…………馬鹿な…………第八ラボの爆発で死んだはずだ！　いや、それ以前に精神が壊れていたはずだぞ！？」

天井事破壊したから、空中に浮いている私の姿がまる見えになっている。

「復活ブイ」

「ブイしゃねえつー？」

「どうか、普通に考えて身代わりだと想つよ？」

「ネタばらしされた…………残念。なので、人差し指で口の端を一々一してみた。

「貴様、おひょくつてこむのかつー？」

「うん」

私も私の姿を汚した怨みは忘れていない…………必要だから生かしてるだけだから。

「おのれ……」

「落ち着きなよ。馬鹿なんだから、相手の思惑に乗つたらダメだよ」

「それもそつだな…………ん？ 何か馬鹿にされたよつな…………」

何気に辛辣。

「まあ、いい。それより、何故知らせなかつたっ！」

「「だつて、聞かれなかつたから」」

「「」」いつら……」

「それに、人形遊びは楽しかつた？」

その言葉で、アズラエルは顔を真つ赤にしながら銃を撃つて來たけど、私には届かない。

「まさか、あれが人形だと…………？」

顔の色が赤から紫に変わつた。

「そう、あれはマスターと私に似せた自動人形…………意思の持たない操り人形」

「ありえ…………いや、クローン技術があるのでから可能か…………では、貴様の目的は私の抹殺か？」

震えながら少女の後ろに隠れるアズラエル。

「違う、私達の目的は慰謝料の請求」

「なんだと…………」

「だから、アズラエル財団の隠し財産を頂いた」

D3のチャージは完了。今の間に連絡を取る。

『ルリ、ハーモニクスか英雄を発見。交戦に入る』

『了解。状況次第で上空から支援砲撃を行います』

『お願ひ』

準備は完了。久しぶりの実戦になるから、気を引き閉める。

「おのれ…………」の事はオープに講義してやるー。」

「お好きにどうぞ…………」

そこまでの力が遺っていたらだけだ。

「その場合、貴方達が私達にした事や非人道的な実験、不正や犯罪の数々をダイジェストで世界中に流すつてマスターが言つてた。もちろん、影武者の事も」

「証拠はどうにあると書つのだ?」

「家政婦は見た?」

「何を言つているんだ!」

「それに、元だよ」

うん、証拠の数々…………私の記録を見せてあげる。

「なつ！」

「これは言い逃れ出来ないね」

五分ほど流すと「了解してくれたみたい。

「くつ、じうなれば…………構わん、殺せ！」

「了解…………騎士、鳩、ゼロを並列起動、身体能力を四十六倍に定義」

そう呟いた瞬間、少女の身体がいかなり加速し、接近して来た。私も身体能力を十倍に定義していなかつたら、見えなかつた。

「D3」

五個のD3から「Lance…………擬似的荷電粒子砲を放ち、牽制する。

「ちつ

少女は身体を捻つて、一つ目の「Lance」を紙一重で回避して、二つ目を捻つた身体を戻しながら刀を振るい、「Lance」を切り裂き、反す刀で三つ目を防ぎました。残りの一つは壁を蹴つて方向転換をして回避した。

「まだ…………」

私の周りに浮いていた六個のD3に、ゼロシステムに従って発射シーケンスを起動する。

「これは少しまずいね…………騎士を更に並列起動…………身体能力を両方八十倍に定義。容量不足、未来予測を停止」

身体能力を限界まで強化した状態（騎士とは雲泥の差）でも、霞んで見えるくらいの速さになつて、次々と「*sance*」を切り裂いていつの間にか私に近づいてきた。

「これで終わりだ」

「つ……*Shield*」

D3六個で空間歪曲を行い、六角形の*Shield*を作りだす。

「無駄だね。情報解体」

空間歪曲の*Shield*をD3」と情報解体され、D3が砂となつて崩れ落ちた。

「これで、王手だね？」

「まだ…………やれる…………」

D3に迫つて行く刀を見ながら、私は隠していた空間から一個のD3から目標に向かつて二つの「*sance*」を放つた。

「無駄な足掻き…………あつ、まぢー」

少女は脇田も振らずに、少女の横を通して行ったLanceを追い掛けた。

「ちっ、間に合わないか……身体能力強化を強制停止、自己領域を開く」

少女は一瞬だけ遅くなつて、即座に搔き消えた。

「なつ、なんだつ！」

「ふう…………なんとか間に合つた…………」

少女は瞬間移動をしたように一瞬で脇田標のアズラエルの前に出現して、Lanceを切り裂いた。

「続けて撃て」

目標のアズラエルに向かつて、残りの五個も合わせた合計七個を二個、二個、二個の順で立て続けにLanceを放ち、ゼロシステムに従つて残り一個をランダムに撃つて行く。

「これは動けない…………」

「おい、私を最優先に守れ！」

そして、私はゆっくりと後ずさる。

「その場合、彼女を殺せないけどいいのかい？」

「構わん！」

「了解…………それに、君は逃げる気かな？」

「一時的な戦略的撤退」

私はD3にアズラエルを目標にした攻撃を続けさせながら後ろに下がる。そして、後ろにある程度下がつたら高度を上昇させて、開けた天井から外の青空へと飛び出した。

「どうするの気だい？ 旦那が自由になつたらボクは気に追いかくよ」

「問題無い…………私が勝つ」

「嫌な予感がするね…………」

「だつ、大丈夫なんだよなー！？」

「こればかりは…………ボクにはわからないよ」

「なんとかしろーーー！」

「無茶を盡りつ…………」

上空で手を振ると同時に、空間が割れてD3と同じ様に空間に仕舞つていたモルドレッジが出現した。

「なんだあれはー！」

「ナイトメアフレーム…………いや、既にモビルスーツか。確かに

アーニャにはこれがあつたね…………これはまずいな…………

私はD3の一箇で防御しながらモルドレッドに乗り込んだ。

シートに座り、コンソールからプラグを取り出して、首の後ろにある接続口に繋げて、モルドレッドとエ・ブレインを完全に同調させる。そうすると、自分の視界のようにクリーンに見える。

「準備完了」

そして、操縦用の球体に手を置いてEFSに接続する。

「システムオールグリーン…………D3を回収開始…………完了。
砲撃を確認、ディストーションフィールドを開く、ダメージ無し」

こちらに気付いたガンタンクから、次々と砲撃を行われるが、全てがディストーションフィールドによつて完全に防がれている。

「ガンタンクの優先度は低、最優先目標の殲滅を優先…………あれ、
いない…………」

いつの間にか一人は居なくなっていました。

「レーダーにも反応は無い…………なら、基地ごと滅ぼす」

私は基地が一望できる場所まで上昇し、両肩にある一対の装甲を眼前で連結する。連結させて構成した4連ハドロン砲を眼下の基地へと向けた。

「シユタルクハドロン…………ふあいやー」

輻射波動と呼ばれる高周波で出来た深紅の奔流を基地に解き放つた。そして、基地が破壊されるのを見て、ガンタンク達はいつそう砲撃を激しくして来た。

「面倒…………纏めて滅ぼす…………」

シユタルクハドロンを一回止めて、前方にレンズのようにな空間歪曲を作りだして、シユタルクハドロンを再度解き放つた。すると、深紅の奔流は空間歪曲レンズを通して拡散して基地全体に流星群のように降り注ぎ、防衛部隊もろとも消滅させた。後に残つたのは、クレーターだけの地面だけだった。

「抹殺対象の生死は不明…………第一目的は完了…………任務完了」と判断し帰還する

『了解、お疲れ様でしたアーニャ。転移サポートを開始します』

「お願ひ」

『これより、ボソンジャンプを開始します』

そして、モルドレッドの転移が開始された。

「…………疲れた…………」

私はそのまま身を任せて眠りに付いた。

騎士の能力はどう考へてもチート（トランザム）

Side デュオ

さて、改造された『デスサイズヘル』で暴れる時間がやつて来たぜ。

『転移準備完了しました。発進シーケンスビツモ』

フェルトの声に従つてシーケンスを開始する。

「デュオ・マクスウェル、デスサイズヘルカスタム行くぜ！」

カタパルトにより加速しながらボソンジャンプが行われ、次の瞬間には目標の基地の上空へと付いた。

「フェルト、目標はどこだ？」

『地下の一キロの地点に不自然な広さがあります』

「広さはどうだ？」

『デスサイズヘルが充分入る広さです』

なら、このまま行くか。

「サンキュー、フルト」

『デュオ、気をつけてね』

「おひー、ジャンプ！」

俺は短距離転移を行い、目的の宝物庫へと向かった。

場所は確かにMSが充分に入る広さがある空間に転移した。

「いや、ある意味財産だよな……………プルトニウムかよ……………」

空間には所せましと並べられた大量の放射性物質のマークが入れられた保存器に入れられたプルトニウムがあった。

「フルト、プルトニウムだが……………どうすんだ？」

『ちょっと待ってくださいね……………回収らしいです』

「どうやって回収すんだ？」

『デスサイズヘルで転移させるのは無理だぞ？

『今からマスターが行きます』

「オッケー」

少し待つと、カナデが変な機械を持って現れた。

「なんだそれ？」

「ボソンジャングルの転移装置。テュオ、四方に1枚の四つの装置を配置して」

「ああ」

言われた通り、地面にモビルスーツで持てるような大きな装置を配置すると、四方の中心にナデシコの格納庫が写った。

「ありがとうございます。後は陽動をお願い。回収が終了しだい撤退するから、基地は完全に破壊して」

「ねつ、任せな」

俺は改めて地上に転移して、基地を破壊しだした。

しばらく破壊していくと、ミサイルが飛んできた。

「無駄だぜ！」

来るミサイルを切って、発射口を破壊していく。

「おつ、ガンタンクのお出ましか…………じゃあ、死神のお出ましと行きますか！」

ゼロシステムを使い、砲撃を避けて接近してガンタンクの装甲を紙のように切り裂いていく。

「弱すきむせつー。」

出て来る端から全てを切り裂き、破壊を続けて行く。そして、ガンタンクが遠くに出て来た。

「丁度いい…………スラッシューシステム起動」

システムを起動しながら、ビームジザースを振ると、刃が回転しながらガンタンクに向かって行き、ガンタンクを切断して行った。

「ヤベー、結構おもしれえな！ 自己領域展開」

自己領域を展開してスラッシューシャーを放つと、かなり速い速度で飛んで行き、逃げる間も無くガンタンクを破壊していった。

「問題はエネルギーだな」

当然、消費エネルギーが半端ねえ。まあ、エネルギー容量は莫大だけどな。

「しかし、こいつはとんでもなくトリッキーだが強いな」

スラッシューシャーの刃もしばらく留まり、ゼロシステムにより計算された軌道を通り、確実に敵を殺していくからな。

「アラートだと？」

殺しながら考えていると、いきなりアラートが鳴り響き、改めてレーダーを見ると、こちらに接近する機体があった。

『デュオ、接近中の所属不明機の映像です』

表示された映像には赤い鳥のようなモビルアーマーが写っていた。

「おーおー、コイツは…………ON-13MS…………ヒオンじ
やねえか!? 誰だ、誰が乗ってやがる…………ヒロカミリアル
ドの田那か?」

『デュオ、ハーモニクスの可能性もある』

「カナーデ、どうするんだ?」

『出来たら機体は捕獲したい』

『マスター、ボソンジャンプ反応です!』

「おいおい、追加かよ…………」

「一体な上に、出来る限り機体を壊さず」「倒すとか無茶苦茶だ。」

『ステラを今すぐダブルエックスで転移させて

増援が来るならいいけるか?』

『了解しました。ステラちゃん、準備は?』

『出来るよ…………』

『ステラ、お願い』

『うん、任せてカナデお姉ちゃん』

カナデの声にステラは元気良く答えたが、……こんな子供で大丈夫か？

『準備完了、発射シーケンスを譲渡します。発進どうぞ』

『ステラ・ルーシュ、ガンダムダブルエックス、……出る……』

…

その言葉と同時に、俺の横にガロードと同じガンダムがジャンプして来た。

『機体制御、問題無し……敵は一体？』

「ああ。行けるか？」

『大丈夫。フェルト、ジャンプしてくる敵の場所をもう一機と重ねて』

『えっと…………はい、大丈夫みたいです』

そして、接近中の敵に向かつて、リフレクターを開いてツインサテライトキヤノンをいきなりぶつ放しやがった。

「おいおい

巨大な一つの光りの奔流をなんとか回避したエピオンと慌てて転移した所属不明機は多少なりともダメージをおつたようだ。

「こきなり無茶苦茶しやがるな…………しかし、短距離転移が出来
る機体か…………嬢ちゃん、あつちの黒い所属不明機のモビルアーマーはこいつで相手するから、赤い鳥…………エピオンの方を頼む
！」

『うふ。ステラ、鳥さんと遊ぶ』

本当に大丈夫かしらんが、やるしかねえ！

「死神のお出ましと行こうか！」

短距離転移…………ジャンプして敵の上空に出た俺は空中で回転しながら、ディストーションフィールドを纏つた足で踵落としを決めてやつた。

その瞬間、装甲が弾け飛んで、中から黒い重装甲の機体が出現した。

「ページ型のMSか？ それにしちゃちつちえな

重装甲を装備したわりに、脚部自身を巨大なスラスター・ユニットに変えてやがるし、さつきページしたのだって高機動ユニットだろが…………パイロットの腕は悪く無いな。

『デュオ、所属不明機がナデシコの中にはつたデータより判明しました。機体名ブラックサレナ…………ナデシコの世界で最強と言われた人の機体です』

「それはある意味助かつたな」

ジャンプ先を強制的にツインサテライト・キヤノンの射線上に変えられたのに、即座に回避行動を行い、掠つただけに終わらした技量は

驚嘆に値するぜ。

『制御コニーチョウはひつてあるから樂ですね。相手のボソンジャンプは封じておきました』

「了解」

不意打ちとはいへ、装甲を一個剥げただけでも儲け物だな。

「うと」

連續で放たれたビームを紙一重でか回避し、ジャンプで背後に移動してビームジザースで切り付けるが、むこうも急降下して回避した。どうやら、ハンドカノン一個とディストーションフィールドによる突撃しか無いようだな。

「さて、行くか」

ジャンプを連續で行い、翻弄しながらディストーションフィールドを纏つたビームジザースで切り裂いて行く。

『あはははは、死んじゃえ！』

むこうはビームサーベルで激しい切り合いが行つている。というか、それはダブルエックスの戦い方か？

「行けっスラッシャー！」

ジャンプしてはスラッシャーを放ち、ジャンプする。これを繰り返して行き、ブラックサレナを追い詰めて行く。

「おりやああああっ！」

ビームカノンの切れたブラックサレナはディストーションフィールドを展開して突撃をして来た。

だから俺はアクティブクローカーを解き放ち、正面からディストーシヨンフィールドを纏つて切り裂きにかかつたが、スラスターを巧に操り避けられた。それが、隙になつて攻撃される。

「甘いぜっ！」

分離したアクティブクローカーは複数の鋭い刃となり、ブラックサレナを後ろから襲いかかつた。

多数の刃に貫かれたブラックサレナは機能を停止した。

「フェルト、ブラックサレナの生命反応はどうだ？」

『ありません……スキャンした結果、死体も血も存在しません』

「それが俺達、召喚された存在とハーモニクスの運命か……」

しかし、機体は消えないな。捕獲狙いだつたからコクピットを狙つたんだが…………機体は生命体じゃないからか？

『あはははは、これで終わりだよー』

ステラはエ・ブレインを機体と同調させて、身体強化を機体に使用し、自己領域まで展開して無茶苦茶な高速機動を行い、変形したエピオンを掴んで捕獲してビームサーベルを使ってコクピットハッチに穴を開け、そこから指を入れて無理矢理えぐり取り、パイロット

を押し潰した。

『捕獲完了』

「こっちもだ

『一人共に苦労様。こっちもプルトニウムの積み込みが終わった。
そつちは全ての機体とパーツを回収して帰還をお願い。ルリ、ナデ
シコで残敵の掃討をお願い。誰一人として逃がしちゃダメだよ』

『了解』

それから俺はブラックサレナとその残骸やページされた装甲を持つ
て、ナデシコから降り注ぐ空を埋めぬくような数々の光りを見な
がら帰還した。

Side ティファ

私は今、とても幸せです。

いきなりガロードが消えた瞬間はとても不安でしたが、少し時間がたつたら私の目の前には知らない女の子がいました。その女の子の話で、ガロードが直ぐにこちらに来るから、ガロードの喜ぶ準備しようとの事でした。結果は、ガロードも喜んでくれたと思います。

「ティファ、大丈夫か？」

「うん。フラッシュユニットも問題無いよガロード」

「わかった。無理だけはしないでくれよ？」

「大丈夫」

例え何があつても私はガロードと一緒にいるから。

「精神の遮断はちゃんと出来てるか？」

「大丈夫、問題無いよ…………あつ、ルリちゃんからの情報……」

「地下に大きな金庫があるって…………それに、地上にハーモークスの存在を確認したみたい」

「殺すだけで令呪による回収が出来るんなら、わざわざ危険を犯す必要は無いよな…………ティファ、ツインサテライトキヤノンを使う」

「わかった。Gビットもガロードが操作して」

「いや無理だつて」

確かにガロードは一コータイプじゃないから、一コータイプ専用のフラッシュシューシステムを使うGビットの使用は普通なら無理だけど、I・ブレインを使えば可能になる。

「いける。ガロード、私と一緒に戻る?」

「えつ、ティファ、何言つて…………」

「嫌?」

ガロードに拒否されると、悲しくなる。

「いや、嬉しいよ…………でも、こんな所で…………」

「よかつた。同調開始…………」

「え? これはティファ…………」

「ガロード、私を感じて…………」

「ティファを強く感じじる…………」

同調能力により、私とガロードは繋がる。これで、ガロードとダブルエックスは私の支配下に入った。だから、私は私の意識下でガロードを自由にする。

「これで…………いい…………？」

「確かにティファを通してラビットを感じじられる」

同調能力で統一していくから、ガロードに支配権を譲り渡したの。

「うん、私もガロードを感じじる…………ん…………」

キスをしていると、通信が入りました。

『何時までいやいやしてないで、お仕事をお願ひします

「「はー…………」」

ルリカゼんに怒られました。

「んじゃ、いつまでもつまんないよ！」

「うん」

ガロードがラビットを整列させ、ラビットのサイトライターやノンを準備して、基地に向かって引き金を引いた。

光りに包まれた基地は、何一つ無くなり、平らな土地があるだけでした。

「じゃ、ジビットで掘り出すか」

「がんばって」

「おうー。」

結局、地下に残っていた人は投降してきました。カナデさんがその人達を同調能力で調べて、安全と判断した人だけ助けました。

Side Out

Side ???

ふう、なんとか脱出が間に合ったね。

「なんだとつ！ ふざけるな、そんな馬鹿な事があつてたまるかつ！？」

アズラエルの方で何かあつたみたいだね。まあ、おそらくはオリジナルのカナデがやつたんだろうね。

「くそつー。」

「それで、電話はなんだつたんだい？」

「ボク達は、イタリアのミラノにいる。それも、アズラエルを氣絶させてボソンジャンプしただけなんだけどね。」

「財団の私設基地のいくつかと連絡が取れないついでに、アズラエル財団の口座から一切の金が無くなつた…………」

地面にひざまづき、〇一一のポーズをしている。いい気見だね。

「やうが…………では、ボクは帰らせてもらひつよ。」

「なんだと！」

「護衛代金は既に請求してあるから、ボクには関係無い事だ。それに、ボクを雇う代金はかなり高いよ？ お金が無くなつた状態では無理だよね」

「ふん、好きにひるー。これだから化け物は…………」

「それじゃ…………やよつなひ」

アズラエルを無視して、天之尾羽張を杖がわりにしつつ歩いていく。

「今日は父さんもいるだろうから、パスタでも買つてこよひ」

エ・ブレインを使い、多めに頂いたお金で食料やワインを購入して

ボソンジャンプで帰った。

ボクが父さんと暮らしているのは安アパートだ。

「ただいま」

「お帰り」

「父さん、帰つてたんだね」

「ああ、昨日は夜勤だつたからな。しかも、訓練だぜ……」

メビウス・ゼロだけ、あれは性能引くすぎなんだよね。

「まあ、『飯を作るよ』

「頼む。しかし、ハジメを引き取つてよかつたよ。お陰で家事をしないですんだ」

「お父さん…………いえ、ムウ…………早く、彼女を作るべきだね」

「うわわわ。だいたい、この頃軍は忙しいんだ」

「プラントへ」

「そうだ。そつちにもこつてるだろ?」

I - ブレインのメールを確認すると、人事部と技術部から収集命令が来ていた。

「確かに戦力として参加要請が来ているね」

ボクは大西洋連邦と契約している。技術の一部提供の変わりに協力者としての士官とモビルアーマーなどの兵器の所持に関する許可と、個人による持ち込み許可を手に入れたんだ。

「で、どうするんだ?」

「もちろん、参加するよ。お父さんの機体も出来たしね

「俺の機体なんか作ってたのかよ」

「ああ。結構強いよ」

用意したのは ガンダムだしね。

「じゃあ、楽しみにしているか。それより、飯が先だがな」

「はいはい」

ザフトに一人、オリジナルが不明、連合にいたハーモニクスは殆どいなくなつたけど、オープやどこにも付いていない奴らはまだまだ存在しているから、そつちも考え無いとね。

ルリちゃんがアズラエル財団やロゴスから徹底的にお金をしほりとつたから、資金はかなり豊富になつた。

ガロード達が持つて帰ってきた財宝もある。

まあ、昨日は作戦が無事に終わつたから、ステラ、ルリ、アーニヤ、フェルトの四人には気絶するまで可愛がつてあげたので、手は付けて無いけど。

「ルリ、火星にボソンジャンプして」

「了解しました」

さて、ブラックサレナもハーモニクスみたいだつたから、かなりポイントも貯まつたし、料理人と医者を召喚しよう。

部屋を移動してから召喚した。

召喚した料理人は二人（一人+一）で、華麗なる食卓から来てもらつた。

どもんかい 土門海、エディブルガーディアンNO.1。37歳。北海道出身で、割烹を主とした料理人。孤児だつたため施設で育ち、そこで料理を覚える。幼い頃から活躍しており神童と呼ばれたほどだつたが、16歳から36歳まで20年間消息不明となる。その間の黒い噂が多々飛び交うが、どれも信憑性に欠けるものだつた。そして再び料理界に復帰。さらに、食材の鮮度の違い、味の良し悪しを目で判断する才能を持つていて、常人では扱うことが出来ないであろう刃渡り

り400mmを越える鮭切り包丁を使用する。サポートに土門樹里子、土門海の一人娘で小学生。北海道出身。エディブルガーディアンN.O.・1のサポートを務めるだけあって、歳の割りに料理の腕前は異常な幼き天才。巧みな包丁捌きとパフォーマンスは派手。土門の30%の力に相当するらしい。小柄なためか、単純に父がでかすぎるためか、土門海の肩に乗つて移動する姿はかなり異様な光景。正直なため不味いものは不味いと言つてしまつ上、父親の料理以外を滅多に褒めない。誕生日は6月22日8歳、身長121cm、スリーサイズB58/W53/H61、血液型A型。

「よろしくお願いします」

「良かう」

「任せて」

「人に説明すると、快く了解してくれた。それに、樹里子ちゃんとはほぼ同じ年だから仲良くなれそう。」

「それじゃ、少しあとに部屋を用意しておるから……」

「いや、部屋は後でいい。それより、今から作るから厨房に頼む」

「はい。少しあとに来てください」

「ああ」

「宇宙戦艦なんてはじめて……」

そりやそうだよね。

厨房に案内したら、二人は料理に入った。

「次は医者……」

医者はナノマシンを使ったケガの治療を得意とする、不思議な雰囲気を持つ少女。人形のように整った顔立ちと、緑色の豊かにカールした髪が特徴。寡黙で冷静な性格のために感情を表すことは滅多にない。この理由は感情をコントロールしないとナノマシンの制御に支障が出るため。そのため、感情をナノマシンが代わりに表してくれる場面もある。ある種の聖職者のような価値観を身に付けており、趣味は聖典を読むこと。だが、時折歳相応の行動をする事がある。ナノマシンを自分の体に貼り付けて顔や衣装を変えて、誰かに成りすましたこともある。なお、星座は第1みずがめ座。

そう、医者はギャラクシーエンジェルよりヴァーラ・Hアッシュだ。当然、ハーベスターは格納庫に召喚した。

「…………Jリは…………ビリ?」

「Jリは別世界。そして、ナデシコココと言つ戦艦の中」

「別世界…………」

やつぱり、普通は悩むよね。

「船医になつて欲しいけどいい？ 今は誰もいないから…………」

「…………分かりました…………未熟な私でよろしければ…………」

「よろしくお願いします」

これで、新しい仲間が出来ました。なので、今日は土門さんに頼んで豪勢にしてもらいました。

Side Out

料理人と医者（後書き）

料理人で悩んだ結果、こうなりました。ガローデ君達はぱつと終わらせました。

テラフォーミング

火星に付いた私達は、遺跡跡に行つてみた。そこには激しい戦いの跡があり、完全な更地となつていた。

「アーニヤ、やり過ぎだぞ……」

「私は悪く無い…………」

戦いはかなり激しかつたみたいで、MSなどの残骸も多数あつた。

「まあまリサイクルとテラフォーミングを開始しよう」

先ず始めにMSなどでジャンクを回収して空地を作りました。

一週間かかり、回収と撤去が終わると、召喚ポイントを多数使ってドームを召喚した。もちろん、ニュー・タイプの意識は解放している。

常備兵力はGビット五千機、生産ラインもあるし、ニュー・タイプの変わりに人工知能…………アリスを作りだし、管理者としたので防衛は平氣だ。

更に食料プラントも増設しておいた。
生贊はプルトニウムのエネルギーなので問題無い。

「酸素があるつて素晴らしいな」

「だな。あつ、俺とティファで案内するよ」

「お願い」

「ここ」の防衛に保険として、デュオとガロードもいるから問題は無いはず。つまり、警察の役割を押し付けた。

「マスター、捕虜と子供達を解放するよ?」

「お願い」

「ここ」に捕虜の人には住んでもらう。捕虜の人達の家族は希望したらこちらに呼び寄せることになる。

子供達はここなら、自由に過ごせるから、大丈夫だと思う。助けた私達には懐いてくれているから、子供達にはエ・ブレインをプレゼントしなきや。というか、普通に考えてもエ・ブレインないとテラフォーミングなんて出来ない。これからもっと大変だから頑張らないと。

更に三週間が立ち、ドームの一部私設を地下に移し、変わりに居住区や商業区を地上に作った。それに伴い、ドームの拡張も行つた。

「カナデお姉ちゃん、ステラも自分の機体が欲しい…………」

火星テラフォーミングの作業が少し落ち着いたので、久しぶり……

……始めて自宅でゆっくりしている所にステラがこんな事を言って

きた。

「ダブルエックス／＼」

テーブルに突つ伏しながら、答えてみた。

「あれはステラには合わない」

確かにそうだけど、私はかなり忙しいの。

「なんていきなり？」

「だって、ルリとフェルトにはナティコノが有るし、デュオにはヘル、ガロードにはダブルエックスがあるのに、私には無い……………」

「諦めて作つてあげたらいい。後、どいて」

修行がわりに我が家に住んでいる樹里子ちゃんが、料理を沢山持つて来てくれた。

「受け取るね」

「うん」

「お願ひ」

三人で数々の料理をテーブルに運んでいく。

「ステラ、ルリとフェルトを呼んできて」

「二人はお仕事だよ？」

「あつ、言つて無かつた？」

「聴いて無いけど、お弁当にするから平氣。ヴァーラはお弁当つて
聞いてたから」

一瞬、樹里子ちゃんが怖かつたけど氣にしない。

「「いただきます」」

「召し上がり」

並んでいるのは、美味しそうな大トロのトロカツ…………南部ソース。

「サクサクのトロトロ」

「うん、溶けるよつよつで美味しいね」

「味は問題無いしと…………食材が知らないのが多いから大変だけ
ど楽しいしいいかな。次はフグの焼霜造り」

今度はお刺身。

「美味しい。厚くて歯」たえもしつかりしていぬし、腕いい」

「ありがと。でも、親父には届いていないから、もっと頑張る」

「「お願ひ」」

ステラと一緒に美味しい料理を食べる為に頭を下げる。

「うそ」

それから、少しして食べ終えたので、私達はまた食後のお茶を楽しんでいる。樹里子ちゃんはお弁当を用意したり、洗いものをしたりしていた。

「ふう、それでステラの機体だけじゃ私も乗れる?」

「乗りたいんだ……」

「お願い…………」

希望に満ちた瞳を上目遣いで見つめて来た。樹里子ちゃんも美味しいつなデザートを持って来た。

「いい?」

白玉団子、胡麻団子…………美味しいぞ!

「…………」

「…………」

しばらく見詰め合った後、美味しい団子を食べさせて貰いました。

お弁当を渡した後、格納庫で作業を行う。

「ステラと樹里子ちゃんの機体……………ステラはヒピオンとブラックサレナで作るわ。樹里子ちゃんは待つて貰おう……………いや、ダブルエックスを渡して……………ショミレーターも用意して渡そう」「さあ、開発しよう。

「ん、ヒピオンはコクピット以外なら殆ど丸々いける。ブラックサレナもそうだけど……………コクピットは一から作らなきゃ」

基本はエピオンにブラックサレナのスラスターなどを取り付けて、超高機動タイプにする。

「Gキャンセラーに変形システム、ドラグーンソード……………それに、装甲はダブルエックスのリフレクターを採用してビームを吸収……………反射させたい」

研究、開発、テラフォーミング……………頑張ろわ。

四ヶ月後、火星の大地に生活基盤……………娯楽私設（映画館、遊園地、公園、カジノなど）も作れた。

「ふう、ガンダムランドグリーズ完成」

ガンダムランドグリーズ

Gundam Randgrid

型式番号：CND-1MS

頭頂高：20.5m

重量：14.5t

装甲：ガンダニュウム、フェイズシフト、リフレクター

武装

ビームソード×2

ブレイククローバー×2

ソードリフレクター

ワイヤースラッシュャー×2

システム

ゼロシステム

ボソンジャンプシステム

ディストーションフィールド発生装置

変形システム

相転移換装システム

ソードリフレクターシステム

自己再生システム

自己生成システム

エナジーウィングシステム

Gキャンセラー

ニュートロジヤマーキャンセラー

空間制御システム

搭乗者：ステラ・ルーシェ

動力は相転移エンジン二基、核パルスエンジン四基、^{ランドスピナー}高機走駆動輪二基を搭載。核パルスエンジンは足の内部に一基づつ搭載してある。更にパージ出来るブースターユニットとして残り二基の核パルスエンジンを搭載。

高機走駆動輪は片手に一基づつ入れて、相転移エンジンは胴部の内
^{ランドスピナー}

部に搭載した。

「出力がおかしくなつてゐるけど…………小型化には成功してゐるから平氣…………多分」

ソードリフレクターは刃型ビットであり、普段は装甲としてビームを弾いて反射してくれる。

ブレイククローバーは爪で相手を止めて、掌から高周波振動破壊を放つ破壊の力。言つてしまえば紅蓮の手に付いてゐるアレです。

ワイヤースラッシュャーは光糸を放ち、相手を止めたり、切り裂いたり出来る。

相転移換装システムは生成システムで別空間で作成したパーティーや用意しておいたパーティを瞬時に換装する事ができるシステム。

エナジーウィングは言つてしまえば光りの翼。

「姿は真つ黒な朱雀みたいになつた」

エピオンやサイバスターの飛行形態に近い感じ。

「さて、ステラにてデータを渡して貰おつ」

後は、私の機体も用意しなきや。

テラフォーミング（後書き）

これからS A Oを書くので書く速度が落ちます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078z/>

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

2012年1月5日23時48分発行